

まこと、ビーバースカウトを楽しむ

浜嶋鉦一郎

登場人物

ビーバースカウトと家族

山本 まこと：小学1年生 新入 主人公

木村 ひとみ：小学1年生 新入

原田 けいこ：小学1年生

伊藤 たかし：小学2年生

山田 けいた：小学2年生

まこと君のお母さん

まこと君のお父さん

けいこちゃんのお母さん

指導者

白木隊長（27歳）ビーバー隊、隊長3年目

下北副長（21歳）：ビーバー隊、富士スカウト

藤橋副長（53歳）：ビーバー隊、副団委員長、元ボーイ隊隊長、元カブ隊隊長

吉川団委員（66歳）：団委員、元ビーバー隊隊長、ビーバー隊専属指導者

川谷副長：カブ隊、ベンチャー隊員の保護者リーダー

坂本副長（21歳）：ボーイ隊、下北副長と同期

浜嶋団委員長（65才）：団委員、元ボーイ隊副長、前カブ隊隊長、ビーバー隊専属指導者

寺田副育成会長（67歳）：団委員、前団委員長

目 次

第1話	悔しかった合同運動会	7
	□ まことの活躍	1 0
	□ ボーイスカウトらしさを出す競技	1 2
	□ 応援合戦を頑張った	1 6
	□ 団対抗リレーで涙	2 0
第2話	豊中のスカウトたちが集まるビーバーランド	2 4
	□ 回転花壇の妖怪大作戦	2 4
	□ 浜嶋団委員長が「おっちゃん」と呼ばれる	3 4
第3話	まことの自然戦隊ビバレンジャー	4 1
	□ わっぱるへ、いざ出発	4 1
	□ 「自然戦隊ビバレンジャーの誕生」	4 7
	□ ビバレンジャー訓練その1（ゴミ大王をやっつけろ）	5 5
	□ ビバレンジャー訓練その2（まさかのスイカ割り）	6 2
	□ ビバレンジャー訓練その3（森の美術館を創ろう）	6 7
	□ ビバレンジャー訓練その4（手裏剣修行で雨が降る）	7 2
	□ ビバレンジャー訓練その5（雨に負けるな夕ご飯）	8 2
	□ ビバレンジャー訓練その6（森の神様は誰だ）	8 8
	□ ビバレンジャー訓練その7（七夕の願い事は難しいぞ）	9 7
	□ ビバレンジャー訓練その8（怖い話は平気と言うけれど）	1 0 1
	□ ビバレンジャー訓練その9（川遊びはやっぱり最高）	1 0 8
	□ ビバレンジャー訓練その10（最終認定試験）	1 1 6
	□ ビバレンジャー訓練その11（願い事は叶えられるか）	1 2 0
	□ ビバレンジャー訓練その12（やり遂げたスカウトたち）	1 2 6
第4話	まことボーイスカウトの活動に感動する	1 3 2
	□ 仲間づくりに英語を使う？	1 3 2
	□ 世界スカウトジャンボリーは、こんなに楽しかった	1 3 4
	□ ホームスティの報告	1 3 8
	□ ビーバー隊の舎営報告はスタンツで	1 4 1
	□ ボーイスカウトの活動はすごいことがいっぱい	1 4 8
	□ やったよ。僕たち「かっこつけま賞」をゲットだ！	1 5 4

第1話 悔しかった合同運動会

5月になった。

今日は、ボーイスカウトの第42回合同運動会がまことの通っている桜塚小学校で行われる。運動場は、校舎の東側にある。この日は、体育館の横にある緑色の門（通称緑門）から出入りする。運動場の大きさは、豊中市の小学校の中でも小さい方で、トラックの1周は100mの距離に満たない。桜塚小学校は豊中市の中心部にあり、歴史の古い小学校のためだ。

この運動会は、豊中第2団の地域と隣接する16団、18団、22団と合同で毎年開催している。豊中地区には全部で16ヶ団あり、これに参加する団は、豊中市の南部に位置している4つの団だ。合同運動会は、当初は2団と22団、それにガールスカウトで開催していたが、少しずつ参加団が変わってきた。運営担当は持ち回りとなっていて、今年の運動会は2団が担当になっている。

まことは、いつもより30分早く起きた。お母さんは弁当を作っているところだった。

「おはよう、まこと」

「お母さん、おはよう。今日は頑張るからね。2団は優勝するよ」

そう言うとまことは、両腕に力を入れて、腰を左右に動かした。いつもの頑張るポーズだ。

「ははは、その格好をしたら、きっと優勝ね」

「優勝するんだ。優勝！」

まことは、そう言い残して顔を洗いに行った。

運動会は、すばらしい天気になった。リーダーたちは、7時から小学校に集合し準備を始めた。トラックの白線を引いたり、本部テントや各団の応援用テントを立て、放送設備、得点表掲示版、演技用具などの準備を8時過ぎに完了させた。8時半には運動場にたくさんのスカウトや保護者が集まった。本部テントはあわただしくなり、人数確認や選手宣誓の練習が始まった。

9時に開会式が始まり、各団代表者で考えたプログラムが始まった。運動会は団対抗戦で優勝団には優勝カップが贈呈される。2団の優勝は4年も遠ざかっているが、今年は優勝が期待されていた。

2団は、順調に得点を伸ばしていった。22団を僅差でリードし、最後の競技となる団対抗リレーは優勝を左右する戦いが繰り広げられた。

まこととお母さんは、運動会の余韻を感じつつ、悔しさをにじませながら家に帰ってきた。二人は、すっかり豊中第2団の一員になっていた。

「お父さん！ どうして今日運動会に来てくれなかったんだよ！」

まことは、晩御飯でお父さんにうつぶんをぶつけた。目の前に大好きなハンバーグが並んでいたが、それ

に箸を伸ばす前にお父さんに言った。

お父さんは、ビールを飲む手を止め、少し困った顔をした。

「ごめんよ、まこと。お父さん、今日も仕事だったんだ。次は、一緒に行くからね。それより、すごく悔しそうだけど、運動会はどうだったのか、教えてくれよ。」

「お父さんは、いつも仕事なんだから。まあ、仕方がないけど」

不服そうなまことを見て、お母さんが横から助け船を出した。

「まこと。さあ、早くお父さんに教えてあげたら」

「じゃあ教えてあげる」

お母さんに促されしぶしぶという雰囲気を出していたが、実のところ、まことは話したくてうずうずしていた。まことは、今日の運動会を思い出して苦悶の表情を見せて言った。

「今日は悔しかったよ」

「どうして？ 優勝できなかったりして」

「まこと、2回は惜しかったね。もう少しで優勝だったからね」

「悔しいよ！！」

これを聞いて、お父さんはその真剣ぶりに驚いた。

「そんなに盛り上がったの？ ああ、お父さんも見たかったな」

「わたし、ちょっと感動したわ。みんな、ほんとに真剣よ。競争っていいね。最後のリレーはすごかった。それで負けたから悔しいのよ。お父さん、まことの気持ち分かってあげてね」

「だから、お父さんも来たらよかったんだ」

「ごめん、ごめん」

まことは、少し落ち着いてハンバーグを食べ始めた。

□ まことの活躍

「ところで、まことはどんな競技にでたの？」

お父さんは、まことの活躍が気になった。

まことは、気持ちを切り替えて話し出した。

「えーっとね。最初に全員の徒競争があって、2位だった」

「それはよかったな」

「ちょっと運がよかっただけ。それからパン食い競争と水運び競争にでたよ」

「まことは、うまくパンを取れたの？」

「やったよー！！」

「おっ、やったのか！ まことは1番だったか」

お父さんは、少し大げさに驚いて見せた。

「1番だよ。ほんと、パンが揺れているでしょ。パンの下に行って、こうして口を開けたら、中にパンが入ってきたので、がぶっと噛んじゃった」

まことは、大きく口を開いて再現して見せた。お母さんも、横から嬉しそうに口を挟んだ。

「まこと、すごかったね。そのままゴールに一直線だったね」

「こうして、がぶっ！」

まことは、パン食い競争を思い出しながら何度も口を開けてパンを噛む真似をした。

「わかった、わかった。よっぽどうれしかったんだね」

「それにね。ゴールしてから1位から4位まで座って待っているでしょ。あの1位の旗のところで競技が終わるのを待っているのは気持ちよかったよ」

「そうか。よかったねえ」

お父さんの顔が自然とにこやかになってきた。

まことは、このあと、水運びゲームと宅急便競争について説明した。

□ ボーイスカウトらしさを出す競技

「他にもね、お父さん。さすがボーイスカウトっていう競技もあったわ。」

まことが、ひとしゃべりして、2つ目のハンバーグを食べている間にお母さんが話し出した。

「ボーイ隊のスカウトは、班旗立てという競技を班単位でやるの。10分間で円の中に立てるのだけれど、一度に3人しか作業ができないの。棒2本と自分たちの班旗をロープで繋いで、班旗を高く上げるの。それを3本のロープで棒を引っ張るにはペグというのを地面に打ち込んでひっかけていたわ」

「ロープだけで立てるのかい？」

お父さんは、状況がつかめない。

「ロープ結びのやり方を知っているからできるのよ」

「ふーん。すごいね、さすがだね」

と言いながら、お父さんはまだ様子がわからない。

「これで1番になった班は6分で立てたのよ。きれいな形だったわ。これが各団の班で一斉に立てるから壮観だったわ」

「でも、あの班旗は、つなぎ目が長くて高さは低かったよ。ずるいよ」

まことが、ハンバーグをほおぼりながら、口を挟んだ、

「どういうこと？」

「うーん……。とにかく、ずるいよ」

お父さんは、まことの自信がありそうな言い方が面白かった。

「じゃあ、まことは大きくなったらできるのかな？」

「僕も、ボーイ隊になったら、班旗立ての練習をするんだ。それで班旗立てで1番になるんだ」

「そうか。頑張ってるね」

班旗立ては、応援席からよく見えるように、各団の応援席の前でやることにしている。応援席のリーダーたちが、大きな声でああしろ、こうしろと声をかけている。要領よく全員が動いている班と班長の指示で動いている班があった。結果は明白である。

班旗が高くなるためには、まっすぐになるように棒をつなぐことが大切。つなぎ目を長くするとまっすぐになりやすいが、高さが低くなる。120度の間隔でロープを3方向に引っ張ることも意外と難しい。班旗の柱にロープを結ぶ位置は高すぎず、低すぎずで美しい形になる。

審査は、速さ、高さ、美しさで評価される。

「2団の結果はどうだったの？」

「それが、あまりよくなかったわ。棒が継ぎ目で曲がっちゃたのよ」

「しっかり結べなかったんだね」

「上手な団は練習してきてて、速くてまっすぐに立てるのよ。団委員長はもっと練習しなさいってボーイ隊の隊長に怒っていたわ」

お母さんが、浜嶋団委員長から聞いた話では、ボーイ隊の吉川副長が隊長のときに、浜嶋団委員長と2人だけで立てたことある。リーダーがやったらどれぐらいの時間で立てられるかを計ってみたのだが、結果は2人で4分だった。

「さすが、リーダーだね。それに、2人でもできるのかい」

「リーダーたちは力が強いし、要領がいいでしょ。団委員長は、1人でも立てたことがあるとも言っていたわ」

「練習が大事だろうね。団委員長はボーイ隊のリーダーもやっていたのかい？」

「豊中2団には、吹田の団から息子さんと一緒にボーイ隊に移ってきて、最初はボーイ隊の副長をしてたんですって。それからカブ隊の隊長を12年間もやったの」

「へえー長いね。それから団委員長をしているのか。経験が豊富なんだね」

「だから、いろいろ活動のアイデアがでてくると思うわ。ちょっと煩い存在かもしれないけど」

「若いリーダーが多いから、いろんなことを教えてくれるのは幸せと思うな。頼りがいがあるということだよ」

「そうね。それと競技だけど、担架競争というのもあったね。一人の患者に三角巾で救急処理をするの。頭、腕、足、そして最後に担架を作って運ぶの。子どもたちはあんなことをよく知っているのね。感心したわ」

「ふーん。ボーイスカウトはいろいろな訓練をしているんだね。実際に困った時は、ボーイスカウトだったら安心だね。まこと、頑張ってるね」

これから大きくなるにつれていっぱいやることがある。まことはお父さんの言葉にやる気ができた。

「うん、大きくなったら練習するよ」

「ビーバー隊では、救急処理もロープ結びはしないわ。まだまだ難しいわよ」

「そうだろうね。ボーイ隊になってからなんだね」

「ボーイ隊になるまでには、まだ時間があるわ。ロープ結びの練習はカブ隊から始めるのよ。まことは、それまでビーバー隊でいっぱい遊ぶんだよね」

「そうか。せめて速く走れるように練習しておくことはできるね」

「うん。速く走れるようにするよ」

まことは、「僕たちだって得点競技を頑張れば、優勝できるはずだ。ボーイ隊は、もっと練習してほしいなあ」と思った。

□ 応援合戦を頑張った

「あとね、応援合戦がすごかったのよ！　ねえ、まこと」

お母さんが、興奮気味にまことに同意を求めた。

応援合戦は、審査員以外の各団全員が参加する3分間のオリジナル演技だ。お母さんも参加したから、話したくてたまらない様子だ。

でも、先にまことが話しだした。

「うん。応援合戦は2団が優勝したんだ。優勝だよ。優勝！！」

あのね、8．6秒バズーカーのラッスンゴレライの振付を使ったんだ。坂本リーダーが考えたの。ちょっとやろうか」

まことは、椅子から下りて、横の広いところでラッスンゴレライの振り付けをして見せた。

「まこと、じょうずだね。それは見たかったな。で、みんなでやったんだろ？」

「そうだよ。全員だよ。でも、ラッスンゴレライの坂本リーダーがよかったからだよ。僕たちは昼休みに初めて練習した。それで午後の最初に応援合戦が始まるんだ。2団が最初の番と決まっていた」

お母さんが続けて言った。

「私たち保護者も全員参加なの。前の日の土曜日に大曽公園で練習があったけど参加できなくて。行ったら、もっと楽しかったかもしれない。それに、2団は、のぼりを10本も持っているのよ。それを振るのも壮観だったわ。この演技は、やり方がなかなか思いつかなくて直前に完成したんだって。当日も練習する時間が足りなくて、私たちは開始時間を過ぎても練習していたのよ」

「へえー、そんなに？　一生懸命なんだ」

このとき、時間が過ぎても集合しなかった2団に対して、本部席から浜嶋団委員長がマイクで注意していた。この競技の審査員は、各団の団委員長だから、浜嶋団委員長は本部で応援合戦の進行を担当していた。

お母さんが説明した。

「団委員長はね、マイクでこんなことを言ったのよ。『2団は、早く集合してください。時間を過ぎています。早く集合しないと減点しますよ』って。ねえ、まこと。あれはひどいよね」

「減点するって！　それでもね、坂本副長は、僕達の練習が最後までできていなかったから止めなかったん

だよ」

「私たちは必死だったのよ。団委員長は味方なのに、あんなことを言わなくてもよかったと思ったわ。それに2回も言ったのよ。ねえ、まこと。私たちのことも考えてほしかったわ」

「ははは、本当に頑張ったんだね。」

でも、それは、団委員長もよくわかっているし、一番優勝したいと思っているのは団委員長だったんじゃないかな。だけど、担当団だから、きっと正々堂々とやりたかったんだよ。それに練習で遅れては、他の団に悪いと思ったから、団委員長も時間稼ぎをしてくれたんだよ」

「お父さん、本当にそう思う？ それなら団委員長に悪いことを言ったわね。ちゃんと考えてくれていたんだ」

「2団のみんなに憎まれても、その時はしかたがなかったのさ」

「お父さんもなんかよくわかっているんだね。見直したわ」

「ははは、客観的に聞いているからね。それにあれだけ一生懸命やってるんだから、もっと団委員長を信頼してあげなくちゃ」

「そうか。毅然としていてカッコよかったかもしれない。きっとそうだったわね」

お母さんは、お父さんの説明で納得した。

お父さんは、2団以外の応援合戦が気になった。

「他の団はどうだったの？」

「どこも特色があってよかったけど・・・」

人数が少ない16団と18団、人数が多い22団、どこもしっかり準備をしたり、練習をしてきていた。

結果発表は、閉会式で行われた。

担当団の浜嶋団委員長が、発表した。

「応援合戦の優勝は、2団です」

坂本副長が団委員長から優勝の表彰状を受け取った。坂本副長は、今回で2連覇を達成した。ずっと前に浜嶋団委員長も1回優勝している。このときは、総合優勝もした。

「坂本リーダーったら、表彰状をもらったときに感動して泣いていたのよ。僕たちも涙が出たよ」

「それは、一生懸命やってきたからだな」

「2団の内容は、他の団と比べて断トツによかったの。他の団の団委員長が坂本リーダーはすごいと誉めていたわ」

2団は、若い指導者が多く、みんなが活躍している。他の団委員長は、若手リーダーが応援リーダーをしていたので、そのことも羨ましがっているとお母さんが付け加えた。

□ 団対抗リレーで涙

ここで、まことは感情を込めて、次のことを説明しだした。

「でも、なんといってもリレーだよ、リレー！！ 悔しいー！」

まことは、また思い出して、悔しさでいっぱいになり、ついお父さんを責めてしまった。

「ああー、お父さんが今日運動会に来てくれたら、優勝できたかもしれない！」

「そうよ、お父さん。私たち、あんなに応援したことってなかったわ。本当に残念だったのよ！」

競技も順調に進み、最後に残すは団対抗リレーになった。

現在の2団の順位は1位。2位とは26点差だ。このままいけば優勝だが、最終競技の団対抗リレーの点数は、通常の倍の点数になる。1位が100点、2位が80点だ。2位までに入れば優勝になる状況だ。

まことも走りには自信があるけど、ビーバー隊からは2年生のたかし君とけいた君が代表で走る。

ビーバー隊員の2人からお母さん、女子リーダー、カブ隊隊員2人、ボーイ隊隊員2人、男子リーダー、最後にベンチャー隊員のそれぞれ代表選手を選んで、合計10人でバトンを渡す。女子リーダーまでは半周ずつで、カブ隊員からは1周を走る。最終ランナーのベンチャー隊員だけが2周する。

まことは、走れないもどかしさを感じつつ、応援席で始まるのを待っていた。

「ランナーの入場です」

放送係の声が聞こえた。

走者が順番に入ってくる。ビシッと一列に並んで、みんな引き締まった表情をしている。まことも本当は走りたかったから、みんながすごくカッコよく見えて、まぶしかった。走者が2手に分かれた。

2団の第1走者は、たかし君。

半周後の第2走者は、2団の応援席の前になる。

2団の第2走者は、けいた君。まことより一つ年上で、面倒見がよく、仲良くしてくれている。

「けいた君、がんばって！！」

まことは、第1走者を待っているけいた君に向かって叫んだ。声が届いたのか、けいた君が応援席を向いて、「任せとけ」というように、にっと笑った。

「位置について、よーい」

「パン！」

ピストルの音と共に、一斉にみんな走り出した。

「いけーっ！」

全員が、声の限り叫んだ。

たかし君は、足が速い。他の団も、第1走者は、2年生のようだったけど、2番でバトンをけいた君につないだ。

「いけーっ！！ 頑張れ、頑張れ、けいた君！」

けいた君は、たかし君より速かった。ちょっとずつ、差を詰めていく。まことは、さらに大きい声で叫んだ。応援を頑張るだけだ。

けいた君がお母さん代表にバトンを渡したのと、22団のスカウトがバトンを渡したのはほぼ同時だった。

「やった、追いついたぞー！！」

その後もなんとか1位をキープして、バトンは男子リーダー代表として走ったベンチャースカウトの手に渡った。バトンを受け取ると、勢いよく飛び出した。

「わあー！ わあー！」

歓声があがる。彼の次は、アンカーで勝敗が決まる。このままトップでアンカーにバトンを渡せば、優勝できる状況だ。

「がんばってえ〜！」

まことも力の限り叫んだ。

第2コーナーを曲がる。2団の応援席の前にやってくる。

みんなが見ていた。そのとき、一瞬時間が止まったようだった。

「あぁー！」

走者が転んだ。

焦って足がもつれたのか、急に転んだ。

その間に、後ろから22団と16団に抜かれ、立ち上がって走り始めた時には、3位になっていた。

「負けるな〜！」

みんな、我に返ったかのように、口々に応援し始めた。

アンカーの白木隊長にバトンが渡ったときは、22団、16団が既に走り始めていた。

「白木隊長、がんばってー！」

白木隊長は、ビーバーの隊長だ。まことは、ひときわ声を上げて叫んだ。

隊長は、思ったより速かった。本来は指導者はアンカーではないが、白木隊長は水泳選手で鍛えているからベンチャー隊員と交替して走ったのだ。でも、追いつけずにそのまま3位でゴールした。

その結果、2団は全体優勝を逃して、2位の結果で運動会は幕を閉じた。

「あぁ、すごく悔しい！ あそこどころばなかったらなぁ。優勝できたよ、ほんとに。ねえ、お母さん！」

まことは興奮して話していた。思い出すと、熱が入るし、やっぱり、悔しくてたまらない。久しぶりの優勝が手からこぼれてしまった。

「そうだったね。でも、みんな頑張ったんだからよかったじゃないの」

「よっぽど悔しかったんだなー」

お父さんとお母さんが、まことを慰めた。

でも、この言葉ぐらいでは、まことの気持ちは抑えられなかった。

「僕、来年は絶対リレーに出る！ それで、絶対勝って、優勝するんだ！」

来年は、坂本副長の応援合戦3連覇がかかる。2団の優勝も5年ぶりになる

お母さんは、ボーイスカウトの話になるとどうしてこんなに熱っぽく話ができるんだろう。お父さんが参加できなくても家でこんなにも家族の会話ができることをうれしく思った。

第2話 豊中のスカウトたちが集まるビーバーランド

5月の後半に服部緑地公園で「ビーバーランド」が開催された。

ビーバーランドは、豊中地区のすべてのビーバー隊が集まって交流する大会だ。全員が集合し、セレモニーを行った後、グループ毎にポイントハイクを楽しむ。各団のビーバー隊長や副長が毎月集まる会議で作ったプログラムだ。ビーバースカウトだけを対象とするため、単純で楽しめるゲームが考えられている。

しかし、この日、まことは残念ながら参加できなかった。

数日後、まことのお母さんに、浜嶋団委員長からビーバーランドの写真をホームページに掲載したという団メールが届いた。

□ 「回転花壇の妖怪大作戦」

「まこと、先週行けなかったビーバーランドは、『回転花壇の妖怪大作戦』をやったんだって。すごい名前だね」

お母さんの言葉に、まことは読んでいたまんがから顔を上げた。

「緑地でやったやつ？ ビーバーランドって」

「そうよ。団委員長から団メールが来たのよ」

「なんて？」

ちょっと気のない返事をした。

「ホームページに写真を載せてくれたの」

まことは、写真と聞いて見る気になった。

「見よう。見よう」

「はいはい、ちょっと待ってね。パソコンを持って来るわ」

お母さんは、ノートパソコンをテーブルに持ってきた。

今年のビーバーランドには、ビーバースカウトと体験の子供が全部で100人ぐらい参加した。リーダーも50人ほどいる。合同運動会も多くスカウトが参加したが、今度はビーバー隊だけのイベントでこれだけの数になる。

豊中第2団のホームページがパソコン画面に表示された。

「あ、あるよ。いっぱい写真があるわ」

「まこと、説明もついているわ。これを読めば分かりそうだ」

「ねえ、『みんなでスカウトサイン』を見てごらん。この真中にいるのは、けいこちゃんじゃないかな」

「どこ？　ほんとだ。２人でやってるわ」

スカウトサインの２名の代表の一人にけいこちゃんが選ばれた。全体で大きな輪を作った真ん中で、ビーバーサインのポーズを取っている。

「すごいな。スカウトがこんなにいっぱいいる」

「その後ろにもリーダーがいっぱいいるね」

写真を見ながら、まことは「けいこちゃん頑張ったね。僕にもやるチャンスがあったのかな」と思った。

「この真っ赤なスカートを着て妖怪体操を踊っているのは、誰だろう。リーダーみたいだ」

「かわいいわね、このリーダー」とお母さんも言った。

白いブラウスに赤いスカート姿のリーダーは、２２団の女性隊長だ。この服だから子供のように見える。

「あ、その上で真っ白いウェアを着ている人は、２団の下北リーダーだよ。ウィスパーだって」

下北リーダー一人でアップの写真があった。

「ほんと顔も真っ白にして、頑張っているわねー」

「にこっと笑って、楽しそうだよ」

グルメハンターのとくと同じようにリーダーは変装してスカウトを楽しませている。

「妖怪体操のあとは、妖怪を探しに行こうって書いてある。きっと妖怪探しをするポイントハイクだね」

「なんだか楽しそうだ。ぼくも行けばよかったなあ」

まことは、残念そうに言った。

写真は、各コーナーの妖怪たちだ。

「モノマネキン？　変な名前だわ。これって何？」

リーダーが体を前にかがませて、右手をぶらりと下げている。ものまねをするマネキンという意味らしい。

「森の中にモノマネキンがいて、みんなが行くとジェスチャーをしてくれると書いてある。このかっこうから動き出すのかな。何のモノマネか書いていないけど、みんなはすぐ分かったって！」

「ねえ、お母さん、ここは、おっちょこちょいの運転手がいたところじゃない」

「そうね。ほんとだ。よくわかったわね」

「それと、モノマネキンのものまねは、象だよ。お母さん、象でしょ！」

「そうだね。右手は長い鼻のつもりだね」

「そうでしょ。象だよ。簡単だよ」

まことは、自分でも同じ格好をして、やってみた。

「こういう格好から、鼻をぶらぶらさせて、こんな感じで歩くんだ」

「ハハハハ、よく似てるわ」

「そうでしょ」

「ほんと、象で間違いないわね」

まことは、にこにこ笑いながら、ジェスチャーを続けている。

お母さんは、またパソコン画面を見た。

モノマネキンの横には、「ノガッパ」がピースサインをしている。

「まこと、次のこれもおもしろいよ」

「そうだ、次を見なくっちゃ」

まことは、気持良くジェスチャーをしていたのを止めて、またパソコン画面の前に戻った。

「おもしろい！ お母さん、このノガッパっていうのはめっちゃ凝っているね」

「黄緑色がきれいだね。妖怪そのものね。リーダーの顔が全然わからないわ」

「お母さん、ノガッパって何？」

まことが聞いた。写真では、その顔が河童のようなお面を付けている。

「え？ 河童のことじゃないかな」

「河童って？」

「想像上の動物よ。本当は川に住んでいるのよ。ノガッパは河童の妖怪よ」

「ふーん。このリーダーは誰かな。顔が見えない。ほんとノガッパを見たかったな」

「ほんとね。頭の上のお皿に水を入れてあげると元気がでるって。河童のお皿のことね」

写真のノガッパは頭の上に紙の皿を載せていた。

「頭の上のお皿は落ちないのかな」

「きっと、水鉄砲でお皿に水を入れるんでしょ」

「水鉄砲！、こんな大きなお皿だよ。時間がかかるよ」

「だから、みんなで一生懸命やるのよ」

「そんなに頭の上に水をかけられたら、ノガッパは水浸しになっちゃうね」

「そのために、合羽を着ているのよ」

それを聞いて、まことは大きな声で笑った。

「ハハハ、お母さん、河童が合羽を着ているの？ おもしろい」

「そうね」

「ああ、おもしろい。おもしろい」

「リーダーたちは体を張って頑張るわね」

「僕だったら、ノガッパの顔にかけちゃうよ」

「それは、リーダーがかわいそうだよ。まこともしたかったね」

「そうだよ、ああ、楽しいな」

次の写真に移った。

「これは、赤鬼青鬼コーナーと書いてあるわ」

「金棒を持った青鬼が、スカウトに何かしようとしている。でも、これは何かを待っているみたい」

「そうだね。青鬼は何かを待っている感じだわ」

「スカウトも木につかまってるよ。青鬼がいなくなるのを待ってるよ」

じっと写真を見ていたお母さんが、大きくうなづいて言った。

「ああ、なるほど。このゲームのルールは、スカウトは、植樹の木につかまっているから、これが安全地帯になっているのね。青鬼は、スカウトが植樹から離れるのを待っているのね。スカウトは、鬼の目を盗んでゴールに行くのよ」

「このスカウトは、次の木まで走るのか。でも、青鬼がいるから飛び出せないね」

「そうね、それに赤鬼もどこかにいるのよ。これはたいへんだね」

「赤鬼はどこかな？ 別のスカウトをつかまえているのかな。ドキドキするね」

まことは、ゲームを想像しただけで、興奮してきた。

「仲間はまだゴールしてしまっただけ」

「ますます、脱出できないよ。このあとどうしたんだろう？」

「リーダーはちゃんと手加減してくれるのよ」

「そうだったらいいけど」

「お母さん、それにしても、この青鬼の衣装がすごいね！ 顔とシャツが青色だ」

青鬼の衣装は、リーダーたちが手作りして作ったものだ。顔も青色に塗っている。ゲームの中でも、楽しんでもらうために、いろんな工夫を考えている。

「それに、鬼の金色パンツもはいているわね」

「そりゃあ、鬼だもの」

「ほんと、だから本物の鬼みたいね」

「金棒持っているから、怖いよ。これはドキドキしたかもしれない」

次は、妖怪ストリートコーナーだ。木にぶら下げた妖怪の写真を探しながら歩くコーナーだ。

「お母さん、ほら、藤橋リーダーがいるよ。2団のスカウトたちだ。他の団のスカウトと一緒にだね」

「何をしているか、ちょっとわからないわ。妖怪を見つけながら歩くって」

「だから、道の横に写真かなにかあるんだよ」

「ストリートだから、この道の両側に写真でもあるのかな」

ビーバーランドは、合同の隊を構成する。そうすることで他の団のスカウトと交流ができる。

「2団だけだったら人数が少ないけど、豊中には、いっぱい仲間がいるのね。ときどき、たくさんのスカウトとイベントをするのは楽しみだね」

まことは、2団の仲間の写真の中に自分の姿が写っていないことに寂しさを感じた。やっぱり仲間と一緒にいる方が楽しい。

次の忘れん帽コーナーは、記憶力のゲームだ。人数が多いのでブルーシートの上には、いろいろなものが用意されていた。

「これは何？ いろんなものが置いてあるよ」

「キムスゲームだよ」

「こんなにいっぱい、人もいっぱいいるわ」

「人数が多いから覚えるものもたくさん用意したんだね」

「僕は、名前が全部わからないよ」

まことは両手を上げて、お手上げだというジェスチャーをした。

「そうね。お母さんも自信がないわ。それに、1分間で33個を覚える。最高は29個も覚えていたと書いてある」

「一人じゃ覚えられないね」

「無理ね」

「みんなどうしたのかな」

「お母さんだったら、覚える場所を分担するわ。自分の目の前のものだけ覚えたらいいと思うな」

「そうか、一人で全部覚えるのは無理だもんね。ああ、もっと広がらないと、だめじゃない」

つい自分の考えを口走ってしまった。

「まこと、これで終わりみたいよ。ビーバーランドにグルメはなかったね」

「ゲームだけか。お母さん、お昼ごはんはどうしたんだろう」

「それは各団でお弁当を食べると思うな」

「2団のグルメハンターもよかったけど、ビーバーランドは、衣装がすごくおもしろいね」

「豊中地区の隊長さんたちが頑張っているのね。それに、これだけたくさんのスカウト仲間がいるって分かれると元気がでるね。ボーイスカウトって、大きな組織だね」

「ああ、おもしろかったわ」

「まこと、これは観察力が大事だね。わかる？」

「そっか。僕は得意だよ」

「2団で練習して、ビーバーランドで頑張ることね」

「うん。お母さん、次の隊集会には参加するからね」

□ 浜嶋団委員長が「おっちゃん」と呼ばれる

□

「まこと、団委員長からまた団メールが届いたわよ」

1週間ぐらい過ぎてから、学校から帰ったまことにお母さんが言った。団メールっていうのは、浜嶋団委員長から不定期にお母さんたちに送ってくるメールのことだ。

「この前のビーバーランドで起きたちょっとおもしろいことが書いてあったわ。」

「ふーん。お母さん、プリンを食べてもいい？」

まことは、冷蔵庫に手をかけながら、返事をした。ビーバーランドのことは、ホームページを見たから、

他にどんなことがあったのかなと思った。

「いいわよ。早くおいで」

まことは、プリンを持ってお母さんの横に来て、ふたを開け始めた。

お母さんがスマホを手に持ちながら、笑いながらメール文を読んでいた。

「ふふふ、団委員長、この前のビーバーランドで、よそのビーバースカウトから『おっちゃんもかっこいい』
と言われたって、自慢しているみたいよ」

「おっちゃんもかっこいいって？」

「そうよ」

「どんなことで？」

まことは身を乗り出した。まことも団委員長をかっこいいと思っているからだ。

「そのかっこいいと言ったスカウトの隊長さんとちょっと前の会議で会ったんだって。それで、『浜嶋団委員長、ビーバーランドのゴールで浜嶋団委員長がかっこよかったことが話題になりました。子どもたちや娘の副長がかっこいいと言っています』って言われたんだって」

「へー。なんでかな？」

「それに、『その体験者が2団に行きたいと言わないといいですが』と追加したんだって」

お母さんが笑いながら言った。

「それって、どういう意味？」

「ああ、この子が16団に参加したのに、2団の団委員長がかっこいいから、2団に入りたいって思うことよ」

「そんなことはないよ」

「そうね。それぐらいかっこよかったってことかな」

「そうだよ」

「よっぽどかっこよかったんだね」

「だから、どこがかっこいいって聞いているの？」

まことは、「お母さんはなかなか話が進まないで困るよ」と言いたいようだ。

「あの日のゴール場所で最終チェックする担当が、吉川団委員しかいなかったのよ。団委員長は、ビーバーランドの役割はなくて、スカウトの写真を撮りに参加したんだって」

「ああ、それから？」

まことは、プリンを食べることに集中していた。

「団委員長は、ゴールにいる人が吉川団委員しかいないので、なにかお手伝いをしようと考えたのね。それで、勝手に報告を受ける担当をやることにしたの。グルメハンターのときの高井隊長みたいにね」

「ああ、整列したりするやつね」

「そこへ、最初に16団のグループが到着してきたの。そのグループにかっこいいと言ったスカウトがいる

のよ」

「そんなこと、わかるよ」

まことは、早く続きが聞きたくて、お母さんを急かした。

「まあ、聞いて。そこで、団委員長は、横に腕を上げて、あの横一列に並ばせる構えをしてじっと動かずに待っていたんだって。そこに、グループが近づいてきた。団委員長は、首だけを右に向けて、近づいた人たちに『ここに並んでください。かっこよく整列してください。保護者も後ろに並んで下さい』と大きな声で言ったのよ」

「それで？」

「次が、おもしろかったところよ」

「ええっ！　どんな？」

まことは、プリンを食べるのを止め、お母さんを見ながら聞いた。左手にプリンの容器を持ち、右手で持ったスプーンは上がったまま止まっている。

「一列に並びながら、団委員長の前にいたスカウトが、団委員長を見上げて、『おっちゃんもかっこいいな』と言ったの。団委員長は『ありがとう』とその子に返事したのよ」

これを聞いた指導者や保護者が笑った。それを16団の指導者たちが後で話題にしたということらしい。

「そうなんだ。団委員長、やったね！」

そこで、まことは、あれ？　なんか、聞いたことのある話だぞと思った。

「ああ、それなら僕も言ったじゃない、グルメンハンターのときに円形花壇の林の広場で言ったよ」

「そうだった？　そうだったね。忘れていたわ」

まことは、「もう、お母さんはすぐに忘れるんだから」と言いたかった。

「お母さんは、しょうがないんだから。それにしても『おっちゃん』だったの？」

「そう書いてあるわ。きっと体験参加のこどもだったのよ」

「団委員長は、スカウトに言われてうれしかったのかな？」

「うれしかったと思うわ。それに、うれしい気持ちもあるけど、まことたちにかっこよくなってほしいから、自分が見本になりたいと書いてあるわ」

「だから、いつも張り切っているのか」

「ボーイスカウトは、けじめをきちっとしているね。そういうのは気持ちがいいでしょ。お母さんは、リーダーたちが見本をまことたちに見せてほしいと思うわ。だから、団委員長はかっこいいね」

「ぼくたちだって、頑張ったことを誉めてもらったらうれしいよ」

「いっぱい誉めてもらえるように、まこともかっこよくなってね。これからも頑張ってね」

「うん、頑張ってみるわ」

まことは、浜嶋団委員長からお母さんに送られるメールを聞きながら、どんどんボーイスカウトが好きになりそうと思った。

第3話 まことの自然戦隊ビバレンジャー

夏休み前の7月初めのことだった。

今回は、豊中市青少年の家わっぱるの小屋に一泊する。ボーイスカウトでは舎営と呼ぶプログラムだ。今日もまことは、朝早く起きてしまった。お母さんが、まことに言った。

「おはよう。まことは、隊集会のときは早く起きるね」

「おはよう。だって、楽しみにしてるんだもん」

「初めてのお泊まりだよ。大きな小屋で泊まるんだって、楽しそうだね」

「今日も頑張るぞ」と言って、また両腕に力を入れて腰を左右に動かした。

「またやっている。ほんとにおかしいんだから」

□ わっぱるへ、いざ出発！

わっぱるは能勢町にある。豊中からわっぱるまでは、電車とバスを乗り継ぐのだが、バスの本数が少ないので車で行くことにしている。集合場所は、豊中市役所だ。まこととお母さんは、家から市役所まで歩いて行った。

白木隊長と浜嶋団委員長が、車の外に出て待っていた。

「おはよう」

白木隊長が、にこにこしながらまことに声をかけてきた。

「おはようございます」

「まこと君、にこにこしているね。楽しいかい」

「うん、楽しいよ。早く行きたいな」

「すぐ、出発するからね」

車は2台止まっていて、中にはすでに全員が乗り込んでいた。

車は、ちょうど1時間でわっぱるに着いた。

わっぱるの手前には、川沿いにプールがあり、その先に大きな駐車場がある。車は右折して駐車場に入っていた。

わっぱるの山は道路の左側にあり、玄関と建物が目の前に見えていた。宿泊棟及び管理棟には、200人が宿泊できる。やや平らな山肌のキャンプ場は12のテントサイトがある。また、キャンプ場の中に20人以上宿泊できる大きな小屋が3つある。それに、場内の裏山には1時間程度のハイキングコースがある。

駐車場には、2台の車が停車していて、4人のリーダーが並んでお出迎えだ。藤橋副長、吉川団委員、下北副長、坂本副長だ。横にリヤカーがある。これは2団のキャンプ用の組み立て式リヤカーだ。

「おはよう、おはよう」

下北副長が、車の中をのぞくように体を傾けながら、中にいるスカウトたちに笑顔で手を振っている。

「やっと着いたー！」

スカウトたちが、わくわくしながら緊張した面持ちで車を下りてきた。

「涼しいわねー」

と別の車から下りてきたお母さんたちが感動交じりで顔を見合わせていた。

「さあ、いいですかー。わっぱるの舎営の始まりだよ」

隊長の大きな声で、全員が動き出した。

大きな荷物はリヤカーに乗せて、リーダーが運んでくれる。レンガ広場まで少しだけ歩くのだ。

「横断は車に注意してね！」

リーダーたちは、早いスピードで走って来る車を警戒している。白木隊長は、見通しの悪い道路の曲がり角を確認しながら、スカウトに横断するように合図した。みんなで一緒に横断歩道を渡った。それからレンガ広場までは、すぐだった。

レンガ広場に到着すると、白木隊長がわっぱるの所員を呼びに、円形状になった階段を駆け上って行った。すぐに事務所から、隊長と一緒に2人の所員が下りてきた。

「こんにちは。今年も利用していただいてありがとうございます。雨が心配ですが、楽しんで下さい。それでは、わっぱるを安全に利用するための説明をします」

いわゆるオリエンテーションだ。所員は、シートやシュラフのたたみ方を実際のシートを持ってきて説明した。また、ハチや蛇に気をつけるようにと注意した。

まことは、初めての参加なので、ちょっと不安になった。

「蛇、大丈夫かなあ」

白木隊長が、まことに向かって言った。

「まこと君、大丈夫だよ。気をつけようね。」

さあ、舎営の始まりです。ここから、一番上の第一小屋まで上がります」

白木隊長は何の心配もしていないようだ。そして、レンガの階段を上がって行くように声をかけた。宿泊棟と管理棟の間を通過、建物裏の木の橋を渡りながら、林の中の細い道を歩いていく。平らな部分や木でできた階段が続いた。道が分かれるところには、キャンプサイトの行き先標識が立っている。細い道はくねくね曲がっていて、楽しそうだ。

スカウトやお母さんたちが初めての道を進みながら口々に何か言っている。楽しそうな明るい声が響いている。舎営が始まる前にわくわくする一番楽しいときだ。

ちょっと急になり、木でできた階段を上がると、わっぱるの中の普通の道にでた。施設の車が通る道だが、舗装はされていない。玄関からぐるっと回り道してつながっている。その道を左に少し下っていく。右側にトイレの建物がある。トイレの先は、三差路になっており、まっすぐ行くと玄関に続く。そこを右に曲がる

と、山に登っていく緩やかな道となる。道の左側は小川が流れていて、右側は林だ。林の中にキャンプ場が隠れている。

「ここもキャンプ場か。いっぱいキャンプ場があるわ」

まことは、道の両側をきょろきょろ見ながら、興味深く楽しんでいた。

「みんなー、大丈夫かな。しんどくないですか」

白木隊長がスカウトやお母さんを気遣って後ろを見ながら大きな声で言った。

しばらくすると正面に小屋が見えてきた。ちょっと高いところにある。

「お、小屋だ。八角形の小屋だ。ちょっと寂しいところにあるな」

まことは、ここに泊まるのかなと思った。

入口は、左側から急な道を回りこんだ上にあった。入口の前はちょっと広くて平らになっている。

「これは、第3小屋です。リーダーが泊まります。スカウトはもう一つ上の第1小屋まで行きます」

後から到着した白木隊長やその他のリーダーは、リヤカーから荷物を取り出して小屋に入って行った。

「お待たせ！」

「じゃあ、出発するよ！」

白木隊長の合図で、また歩き出した。左側は川から山に変わり、道は少し急になった。右側はずっと平らなキャンプサイトがある林が続いている。

急な坂道はしんどそうだった。ゆっくり登っていく。

今度は、左側の林の奥から小屋が見えてきた。小屋の前まで行くと、入口は幅が広くて急な階段の上にある。入口の両側に靴箱がたくさんあることから、かなりの人数が入る大きさだと分かる。

白木隊長は、その小屋を通りすぎて、さらに歩いて行った。

「これは第一小屋だよ」

とたけし君が教えている。去年、たけし君はここに泊っている。

みんなは、どこにいくのだろうと思っている。

「もう少し頑張って。この先にある広場まで行くよ。小屋には後から入ります」

右側の林の中に平らな広場がちらりと見えてきた。道路から外れて、小道を歩いて広場の方に入っていく。

「はい、荷物を置いて下さい」

白木隊長は、自分の荷物を広場の奥にある大きな長いテーブルの椅子に乗せた。他のメンバーもやっと着いたという安堵の表情を浮かべながら、ザックを椅子の上に置いた。

□ 「自然戦隊ビバレンジャー」の誕生

「今から、開村式を始めるよ。荷物を置いたら広場に集まって下さい」

開村式というのは、ボーイスカウトの独特のネーミングだ。キャンプの初めのセレモニーも開村式と言う。

白木隊長は、テーブルの横に立ってみんなに何度も言っている。全員が、ザックを置いてからすぐに広場に戻った。広場に全員が集まった。お母さんたちは、これから何をするのかと思いながら、隊長の動きを見ている。

先に来ていた下北副長が、すばやく隊旗を立て終えた。

周りに立っているリーダーが、一斉に白木隊長の方を見る。

白木隊長が、隊旗を背にして集合をかけた。

「集合！」

まことは、戸惑いながら隊長の前に駆け寄った。たけし君は、すでに白木隊長の前に並んでいた。

浜嶋団委員長が、すばやく白木隊長の前に出て行って後ろを向いた。他のリーダーは浜嶋団委員長の前にどんどん並んでいく。

「保護者、スカウト、指導者の順番に並んで下さい」

まことは、けいこちゃんの後ろに並んだ。

「報告、リーダー全員整列しました」

浜嶋団委員長は、白木隊長に報告している。後ろに6人のリーダーが気おつけの姿勢で並んでいた。

スカウトとお母さんたちは、これはなんなのかと思った。リーダーたちは最初から相談していたのだ。

スカウトとお母さんたちはゆっくり並んでいる。スカウトはお母さんたちよりは早く並んだが、まっすぐになっていなかった。

「はい、全員並べたかな」

「リーダーを見て下さい。きれいに並んでいますね。この舎営では、集合するときは、このようにスカウト、保護者、リーダーで並ぶことにします」

「競争するの？」

一番前にいるたけし君が聞いた。

「そうだよ。早くきれいに並ぶと気持ちがいいね。プログラムをする時間だって、たくさんできるからね」

「早く並んだら得するんだ！」けいた君が声を出した。

「けいた君、そうだよ。遊ぶ時間をたくさん作ってください。それでは、保護者がスカウトの列に入って2列になってください」

保護者が、スカウトとスカウトの間に入り込んで2列になった。

「それでは、ビーバーコール、『みんなで大きなわをつくろう』の歌を歌いながら、大輪を作ります。隣どうし手をつないで下さい」

白木隊長が歌いだして、みんなも歌った。

「みんなで大きなわをつくろう

みんなで大きなわをつくろう

大きくできたら　きれいにできたら

みんなであそびましょう

ビーバー！ ビバ、ビバ、ビーバー！」

全員が敬礼した。

「こんにちは。ただいまよりビーバー隊の開村式を始めます。

この舎営では、わっぱるの森でたくさんの冒険をしてもらいます。遊びもいっぱいあります。

そこで、スカウトの皆さんには、ビバレンジャーになってもらいます。」

白木隊長の挨拶は、スカウトの気持ちを一気に変えてしまった。

「ビバレンジャーとは、ビーバーのレンジャーのことです。自然を大切にするレンジャーで、いくつかの使命を自分たちの力で達成してください。

自然戦隊 ビバレンジャー！ 頑張るぞ、ビーバー！」

白木隊長が、最後に大きな声で言った。最後の「ビーバー！」は、リーダー全員が大きな声を出した。この声で、みんながびっくりしてしまった。

セレモニーが終わると、ビバレンジャーの隊長であるビバ隊長が現れた。黒いサングラスを付けている。

「下北リーダーだ！」

「下北リーダーだ！」

スカウトたちが、リーダーの名前を呼んだ。

「私は、ビバレンジャーの隊長、ビバ隊長だ。今から、君たちビバレンジャーは、私の隊に所属することになった。そこで、ビバレンジャーには、3つのおきてを守ってもらう。

- ・ひとつ、大きな声で返事をします
- ・ひとつ、自然を大切にします
- ・ひとつ、集合を早くします

ビバレンジャーたちよ。このおきてを守れるかな？・・・ん、守れるかな？」

「はい、はい？」

「あれっ？ 守れていないね。守れていないよー！『大きな声で返事をします』ができていませーん！」

「さあ、守れるかな！」

「はい！」

「いいぞ、ビバレンジャー！ 頑張ろー！」

ビバ隊長の挨拶が終わった。でも、これだけではなかった。

すぐに、ビバ隊長は、スカウトの後ろを指差しながら、大げさなかつこうをした。

「ジャーン！ ビバレンジャー任命テストだー！」

では、君たちが本当のビバレンジャーになるために、あそこのロープを渡ってもらいます」

指を指した方には、藤橋副長が立っていた。その横にロープが張られている。このロープは、先発隊のリ

ーダーが予め構築しておいたものだ。

「さあ、藤橋リーダーの前に集合だ！ 急げー！」

スカウトたちは、早くロープを渡ろうと、走って藤橋副長の前に並び直した。

今度は、藤橋副長が説明した。

「こういうときは早いですね。

はい、これはビバレンジャーになるためのテストです。

気をつけて渡って貰います。いいですか？

途中で落ちたら最初からやり直しになります」

みんなは、簡単だと思った。グルメハンターで綱渡りをしてるからだ。

「最初は、たけし君からやってみよう」

「はい！」

「頑張れー」

「頑張れー！」

たけし君は、軽々と渡ってしまった。

「簡単、簡単だ」

「よーし、ビバレンジャー、合格！」

下りるところで待っていたビバ隊長が大きな声で宣言した。

「次はけいた君」

全員がロープを渡り終わると、ビバ隊長が腕を横に伸ばして言った。

「ビバレンジャー、一列で集合」

スカウトが並び終わると、白木隊長が、何かをビバ隊長に渡した。

「それでは、ビバレンジャーたちにビバ隊長からビバレンジャーバッジを渡します」

大きな丸いバッジだ。そこには何もついていなかった。

「これからいろいろなゲームに挑戦することで、ビバレンジャーのおきてを守ったら、いろいろな形をしたバッジをあげます。それをビバレンジャーバッジに貼り付けてもらいます。帰るときには、いっぱい付けて立派なビバレンジャーになって下さい」

これで5人のビバレンジャーが誕生した。みんなうれしそうな顔になった。

「さあ、お昼だ。やっとなだだよ」

ここで、スカウトたちの緊張が解けて、いろいろな声を出した。

「やったー！」

「ああ、お腹すいたよー」

「お母さん、ちょっと緊張したわ」

まことに言われて、お母さんはにこにこした。

リーダーたちは、それぞれが動いて、なにやら準備をしている。

「テーブルで食べます。テーブルに移動して下さい。みんな弁当を出してね。お母さんたちも一緒です」
全員がテーブルの周りに座り終わった。

これからは、白木隊長ではなく、下北ビバ隊長が中心になってプログラムを進めていくことになる。

「ご飯の歌を歌います。森の中で食べるご飯はおいしいぞ。大きな声で歌うと、もっとおいしくなるぞ」
みんな、楽しそうに歌い始めた。まことも、元気に歌った。

ご飯だ ご飯だ さあ食べよ

風もさわやか 心も軽く

みんな げんきだ 感謝して

楽しいご飯だ さあ食べよ

(「線路は続くよどこまでも」の替え歌)

「それでは、手を合わせて、いただきま〜す」

□ ビバレンジャー訓練その1 (ゴミ大王をやっつけろ)

昼食の後、スカウトとお母さんたちは、第1小屋に荷物を運んだ。

「ちょっと暗いですねえ」

「ほんと、雨戸が半分閉まっているみたい」

「あれっ、ガラス戸がないわ。寒くないかな」

お母さんたちが、話している。

網戸の外側に雨戸があるが、その間にガラス戸がない。夏は網戸だけでいいのだろうが、今はそうはいかない。梅雨の真ただ中で雨が降る日もあるので、雨戸が閉まったままになっている。外も曇り空だから暗いのだ。

小屋には、藤橋副長と浜嶋団委員長の2人のリーダーだけが入った。お母さんは全員いる。

「みんな、こっちに来てください」

5人のスカウトが、藤橋副長の周りに集まった。お母さんたちは、離れて見ている。休憩の姿勢をしている。

「じゃあ。昼からのプログラムを始めます。整列！」

スカウトだけが、一列になった。

「いまから、吹き矢を作ります。ビバレンジャーは、悪い奴をやっつけるために、いろいろな修業をしましょう。吹き矢はその一つです」

浜嶋団委員長役はなさそうと、きょろきょろしたあと、雨戸を開け始めた。お母さんたちも残りの方向の雨戸を開け始めた。それでも、少し明るくなった程度で、薄暗いままだった。

藤橋副長は、スカウトを座らせた後、新聞紙とハサミを取りだした。

矢の筒は、新聞紙を丸めてからテープで止める。矢も紙で先をとがらせてから、筒に合わせて切る。実演しながら説明した。

「矢の方はなかなかできないや」

「じゃあ、できないスカウトはこちらに持ってきて下さい」

藤橋副長が手伝っている。矢は一人5つずつ作る。なんとかできてきた。

入口から何か音が聞こえてきた。

「あれはなんだ！！」

突然、黙って見ていた浜嶋団委員長が、入口を指差した。大きな声にみんなびっくりして、入口を見た。

入口の閉められている網戸の向こう側に、白い衣装を着たあやしい人が踊っている。顔は黒い布を被っていて眼鏡もかけている。これでは誰かわからない。

「ハハハハ、俺はゴミ大王だ。この山をゴミの山にしてやる！」

大声で叫んでいる。

「ハハハハ、ビバレンジャーたち、向かってこい！！」

ここで、藤橋副長が立ち上がって、スカウトに話しかけた。

「悪い奴が現れました。さあ、ビバレンジャーの使命はなんだったかな？ 覚えていますか？ 3つありましたね。けいた君、覚えている？」

「忘れた」

「僕も忘れた」

「私も覚えていない」

けいた君に続き、たかしくん、けいこちゃんも口ぐちに言った。藤橋副長は、がっくり肩を落とした。

「ご飯を食べたら忘れてしまったの？ ビバレンジャーたち、しっかりしてね。

最初だから、もう一度言いますね。

一つ、大きな声で返事をします。

一つ、自然を大切にします。

一つ、集合を早くします。

だったね」

「そうだった」

「思い出した」

ビバレンジャーたちは、藤橋副長に言われて、思い出したようだ。

「ゴミ大王と言っているよ。ビバレンジャーはどうしたらいいですか？」

「自然を大切にする」

けいた君が言った。

「そうだね。じゃあ、ビバレンジャーの使命を果たして下さい。みんなの力を合わせて、ゴミ大王をやっつけてください」

「よし！ この吹き矢でゴミ大王をやっつけるんだ」

「おっ！ まこと君。そういうことだね。この吹き矢が役に立つと思います」

ビバレンジャーたちが状況を理解した頃、ゴミ大王が大きな声を出した。

「ハハハハ、ビバレンジャーたちよ。何を相談しているんだ。おまえたちは、たいしたことはないな。ゴミ大王と戦う勇気はあるのか。俺はいまから広場をゴミだらけにするぞ。ハハハハ。バーイ！」

「ゴミ大王が、あんなことを言っています。ビバレンジャーは自然を守らないといけませんね。頑張ってください」

「いくぞ！」

「おー！ 行こう！」

スカウトたちは、吹き矢を持って小屋をでた。玄関は高いところにあるので、広場でゴミ大王が踊っているのが見える。

「あんなことをしてるぞ」

「許さないぞ」

「行こう！」

「行こう！」

プログラムが一気に活気を帯びてきた。

「お母さんたち！ 行きますよ」

浜嶋団委員長が、やっと立ち上がったお母さんたちに声をかけた。

お母さんたちも素早く動きだし、やる気が出たようだ。

広場では、ゴミ大王が、まっ白いウェアを着て動き回っていた。風船を体にいくつもつけて、袋から新聞紙を丸めたものを出しては、撒き散らしていた。

スカウトたちは、広場に着くと、ゴミ大王の周りを囲んだ。やはり、顔が分からない。

「ハッハッハッハ、ゴミは美しいなあ」

「やめろ！」

「ゴミをまくな！」

スカウトたちは、真剣に怒っている。

「楽しい、楽しい、ハッハッハ」

「この細い体とこの声は、あのリーダーしかいない」

けいた君が言ったけど、まことにはどのリーダーか名前が分からなかった。

「顔を見せろ！！」

「顔は見せられないんだ！」

「黒い眼鏡を取れ！」

「だめだ！！ それよりも、俺と勝負をしろ。お前たちが持っている吹き矢でこの風船を割れるかな。風船が無くなったら、俺の力は無くなってしまう。力が残っている限り、ゴミを撒き散らすぞ。ハッハッハ、それー！」

また、丸めた新聞紙を撒き散らした。

そこへビバ隊長が、駆けつけてきた。

「ビバレンジャーたち！ 悪いゴミ大王をやっつけてくれー！ 私のメガネを盗んだんだ！ 風船を割ってくれー！」

あのメガネは、ビバ隊長のものだったのだ。

ビバ隊長の命令で、ビバレンジャーは、全員吹き矢を吹き始めた。ゴミ大王はぐるぐる回って、矢をかわしている。

「割れないなー。跳ね返ってしまう」

「ハハハハ、全然平気だぞ。それ、ゴミだ、ゴミだ、ゴミだ。ゴミは美しい」

「パン！」

「あ、割れた？ 本当？ やばいなあ」

ゴミ大王は、少し心配しだした。

「やっちゃえ、やっちゃえー！」

みんなは、吹き矢だけでなく手も使って割り始めた。

「降参！ 降参！」

ついに、ゴミ大王は座りこんでしまった。

「お前の顔を見てやる。メガネを取れ！」

けいこちゃんが、座っているゴミ大王のメガネを外した。

「あー！ やっぱりー！」

「坂本リーダーだー！」

「参った、参った、参ったよー」

これで、ビバレンジャーの吹き矢のプログラムは終わりと藤橋副長が宣言した。

□ ビバレンジャー訓練その8（まさかのスイカ割り）

白木隊長が、スイカとブルーシートを持って、広場に入ってきた。

「つぎは、スイカ割りー！」

「イエーイ！！」

リーダーたちが大きな声で景気をつけた。ばっちり合っていたから、気持ちがいい。

「じゃあ、その前に、ビバレンジャーは、協力してゴミを集めましょう」

藤橋副長が、ビニール袋を持って、みんなに声をかけた。

「はいー！」

スカウトたちは、ゴミ大王を退治して気分がよくなっていたので自然と返事をしていた。あっという間に、ゴミは無くなって広場はきれいになった。

ビバ隊長が、バッジを持ってスカウトの方に近づいてきた。

「ビバレンジャーたちー！ ここに集まって下さい」

ビバレンジャーが整列した。

「さっきゴミ大王を退治してくれたので、バッジを渡します。好きなバッジを取って下さい」

最初のバッジをビバレンジャーバッジに貼り付けた。ビバレンジャーバッジの使い方がやっとわかった。

「それから、まだ、ありますよ。さっきは、大きな声で返事ができましたね。もう一つのおきてでもできました。だから、そのバッジも渡します。二つ目のバッジを取って下さい」

「やったー！」

スカウトは気が付かなかったけれど、リーダーはちゃんと見ていた。こうしてバッジを増やしていく。

「スイカ割りは、私の担当で～す！！」

白木隊長の準備が終わると、浜嶋団委員長がスイカを割る棒とタオルを持ってでてきた。

「みんな、見てよ。冷たそうなスイカだよ。すぐ食べようか」

「ええー！ うそだろ？」

「冗談で一す。食べるだけじゃあつまらないから。スイカ割りをやろう！ ルールを言います。10回ぐるぐる回ってもらいます。

体をスイカの方に向けますからまっすぐ歩いて、ここかなと思ったら、棒を振り下ろしてください。

みんなが教えてくれるから、よく聞いて進んで下さい。タオルで目隠しもするよ。頑張ってください」

最初の番は、みんながひとみちゃんに譲った。

浜嶋団委員長は、ひとみちゃんの肩を持って、上からぐるぐる回した。浜嶋団委員長の手がひとみちゃんから離れて、ひとみちゃんが歩き始めた。

ひとみちゃんは、ゆっくりまっすぐ歩いて行く。

「いいぞー！ いいぞー！」

と声援が飛ぶ。

しかし、まことは一人でつぶやいた。

「あ、いかん、ぴったりだ」

「いいよ！ そのままー！」

応援は続く。

「ほんとにまずい。ああ、僕はどっちを応援すればいいんだ」

「いいよー。まっすぐにー！ そうだよー！」

さらに応援が熱を帯びてきた。

ひとみちゃんは、すなおに進んでいく。

「そこで座ってー！」

「ああ、座ったよ。ほんとうに？」

そのとき、止めようとするのには遅かった。

「降ろせー！」

棒が、スイカの上にまっすぐ下りてくる。

「バチッー！」

スイカが割れた。ひとみちゃんが割ってしまった。

「えー！ 割れたのー！」

スイカの真っ赤な中身がはっきりと見える。完全に割れた。文句なしの一撃だった。

大歓声！！

ひとみちゃんは、目隠しを取ると、跳びあがって喜んだ。ひとみちゃんのお母さんもやった、やったと喜んでいる。

リーダーたちは、みんな笑い転げるぐらい、奇跡的な一番バッターのホームランだ。お母さんたちもすごい、すごいと言って笑っている。

「僕たちのスイカ割りはどうするの？」

けいた君もたかし君もけいこちゃんも悔しそうな顔をしている。

浜嶋団委員長が講評した。

「うわー、すごいな！ アッ、ハッハッハ、こんなことは初めてです。みんなで拍手をしましょう。ひとみちゃんおめでとう！」

浜嶋団委員長は、何度も不思議そうに頭を傾けながら、大きな拍手を続けた。

「ひとみちゃん、すごかったね。おめでとう。」

他のスカウトは、残念ですねー。ごめんね。でも、ひとみちゃんがすごかった。

さあ、縁起のいいスイカをいっぱい食べましょう」

トレーに食べやすい大きさに切られたスイカが並んだ。

「さあ、食べて下さい。お母さんたちも遠慮せずに食べて下さい」

全員でスイカをたくさん食べ始めた。

「おいしいね」とみんなで言いあった。

「おいしかった。悔しいけど、おいしいや。でも、なんかもやもやするわ」

まことは、言いようのない気持を押さえた。

さらに食べながら、男のスカウトたちは、種飛ばしに熱中した。これで、少しは気持ちが治まったようだ。

□ ビバレンジャー訓練その3（森の美術館を創ろう）

第3山小屋まで、家族クイズ大会をしながら下りてきた。

次のゲームが始まる。

藤橋リーダーが、ビバレンジャーとお母さんたちを集めた。

「次は、森の美術館というプログラムをします。

ここに、紙でできた枠があります。中は何もありません。

でも、こうして両手で枠を持って、腕を伸ばして枠の中を見ると・・・わっばるの森が見えます。枠を動かすと中の景色は変わります。

みんなは、この小屋の周りで、これはいいなあと思う自然の景色を探して下さい。3つ探してください。それがそろそろ森の美術館が完成します。後から、そこに行って発表してもらいます。どうしてそこを選んだのかを説明して下さい。

お母さんと一緒に探してもらいます。分からないことがあったらお母さんに相談して下さい」

「15分で戻ってきて下さい。はい、スタートです」

5組の家族が美術館になる景色を探し始めた。親子のプログラムでお母さんの出番となった。まことはお母さんと相談を始めた。

「お母さん、おもしろそうだね。どこに行こうか？」

「自分で考えるといいよ。」

「う～ん。この小屋は8角形で変わった形をしているでしょ。小屋が入るようにしたいなあ」

「そう！ いいかもしれない」

「じゃあ、ちょっと下から見たいから行くよ」

一人で走り出した。

「走ったら危ないよ！」

お母さんは、急な道をそろりそろりについていった。

下で待っていたまことは、お母さんに感想を言った。

「でも、横から小屋を見たらあまり良くないわ」

まことはちょっとがっかりした。道が下にあるので、見上げる感じだ。コンクリートの土台が大きくて汚いところがめだつと考えた。

「お母さん、下はあまりよくないみたい」

「そう、どうして？」

「小屋の横には木がない。崖になっているからつまらない」

「ほんとだ。じゃあ、上に行く？」

「そうしようか。上には木がいっぱいあるよ」

二人は、上に移動した。

「うわ、木の向こうに小屋の窓が見えるから、これはいいぞ」

「枠から見たらどうなるの？」

「狭い！ 狭いわ！ 全部が入らない」

「もっと上に行く？」

「枠を近づけるとちょうどいい感じ」

「よさそうね。もう少し上に行ったらどうなの？」

少し上に歩いた。

「全体が入ってきたけど、高くなったから少し上から見下ろす感じになる。まあ、いいか。一つ決定！」

建物の後ろ側は林になって草がいっぱいある。足元が悪いので入っていけない。

「後2つか。お母さん、玄関で1つやってみるよ」

「じゃあ、下に行こうか」

玄関前に戻ると、けいた君がいた。

「けいた君、ここで見つけたの？」

「まあ、まあね。教えないよ」

「別にいいよ。自分で考えるから」

後ろを見たら、さっきここに上がってきた時に見つけたものがあつた。

けいた君に聞こえない声でお母さんに言った。

「お母さん、賢者の道っていう看板を撮りたい」

「古い感じでいいかもしれないね」

それを見てから、お母さんも小さな声で返事して、にこっと笑った。

賛成してもらった。でも、ちょっと離れないといけないようだ。今度は建物に寄って行ってから、振り返って賢者の道を枠に入れてみた。

「いい感じだよ。お母さん」

後ろに回ってきたお母さんもそうだという顔をしていた。

残りは1つだ。さっき考えた玄関を考え始めた。崖の境に低い木が1本あつた。

「お母さん、この木が入るといいかもしれない」

「そうだね。写真は、真ん中に見たいものがあつて、近い物と遠いものがあるといい絵になるよ。枝でもいいからね」

「入るよ。これでどうかな」

お母さんが覗き込んで、指でOKサインを出してくれた。

「このことをリーダーに説明するといいよ。これで、まことの美術館が完成だね」

「うん、できた」

「終了！ 全員集合して下さい」

そして、全員で自分の作品を発表した。

藤橋リーダーがまことを誉めた。

「まこと君、どれもいいですね。最後の景色はまこと君の言うとおりで。景色のバランスがいいですね。近くにあるものを少し入れると奥行きがでて、とてもバランスのよい絵になります」

「お母さんの言ったとおりで」

お母さんは、黙ってにっこりした。

まことは、お母さんと一緒に考えるプログラムでいい気分になった。お母さんもうれしそうだった。

□ ビバレンジャー訓練その4（手裏剣修行で雨が降る）

今度は、プログラムの担当が白木隊長に代わった。

「つぎのプログラムを始めます。それでは、第3小屋の中でやります。全員小屋に入ってください。お母さんたちもお願いします」

そこで、浜嶋団委員長が、みんなに黙って道を下に歩いて行ってしまった。戻ってこないような雰囲気だった。まことは、心配になった。

「だんいいんちょうー！ どこに行くのー！」

「おーー！ まことー！ 晩御飯の準備をするからなー！ お腹をすかしておけよー！」

まことは、そうなんだと思って安心して声を返した。

「おいしい晩御飯を作ってねー！」

「わかったー！ まかしておけー！」

まことは、「さあ、早く入ろう」という白木隊長の声に促されて小屋の中に入ったが、中は暗かった。外も雲が厚くなり暗くなってきた。

「なかは暗いね。もうすぐ目が慣れてくるから明るく見えるよ。でも、みんな疲れてきたね。座りましょう。お母さんたちは、ゆっくりして下さい」

白木隊長は折り紙をたくさん持っていた。

「さあ、ビバレンジャーたち。まだ元気は残っているかな？ つぎは手裏剣を作ります。

はい、ちょっと聞いてね。どうして手裏剣を作るかを説明します」

隊長はみんなの真ん中に移動した。

「みんな、テレビでやっている何とかレンジャーって知っているよね。映画のエイトレンジャーもある。あれは忍者という意味だよ。ビバレンジャーも自然を守る勇士です。忍者は昔ほんとうにいました。忍者は武器として刀以外にも手裏剣をもっていたんだ。そこで、君たちは、ちょっとだけ忍者の気分になってもらって、手裏剣を作る競争をしてもらいます」

「手裏剣を飛ばさないの？」

たかし君が聞いた。

「手裏剣は、自分で工夫して作るんだ。作らないと飛ばせないでしょ。早く作ることも大事だよ」

「だから、作る競争をするの？」

「けいこちゃんの言うとおりで。競争で作りましょう。作ったあとは当てる競争をします。

いまから、折り紙を配ります。4枚ずつあるからね。

リーダーが、作り方を教えてくれます。坂本リーダー、下北リーダー、藤橋リーダー、吉川リーダー、お願いします」

「イエーイ！」

また大きな声を出した。

坂本リーダーが、今度は立ちあがった。

「イエーイ！ さあ、元気を出して行こう！

ビバレンジャーも『イエーイ！』と言ってみましょう。せえの」

「イエーイ！」

声がそろった。

「グード！ いいよー。元気が出てきたでしょ。はい、これを見て下さい。完成した手裏剣です」

「お、カッコいい！」

「それ、いっぱい飛ぶの？」

「これは、4つの折り紙を組み合わせます。こっちは1枚から作ったものです。この部分になります」

右手に持っている1つのかけらを左手の手裏剣に重ねた。

「あー、わかったー！」

「ほんとうにわかったかな？ じゃあ、始めー！」

まことは、下北副長が教えてくれた。

紙を折るのは簡単だ。組み合わせるのが難しい。

「ちょっとリーダーやってみて」

「じゃあ、やるから、見てて。あとで自分でやってね。わかるかな？ どう？」

「わかった。やってみる」

リーダーは、すぐにそれを外して、それをまことに渡した。

今度は、なんとかできた。

「自分で、全部できるかな」

「わからない」

「後で競争するから、自分で組み立てないといけないよ」

「じゃあ、もう一度やってみる」

作った手裏剣をばらばらにした。

「う〜ん。リーダー、見本を見せてくれる？」

「はい、どうぞ」

まことは、もう一度、考えて組み立てた。

「できたー！」

「よかったね。もう大丈夫みたいだね」

白木隊長が立ちあがった。

「はいー！ みんなできたみたいだね。今から早く作る競争をするけど、できるかな？」

「できるよー！」

「じゃあ、初めに一つを作る競争をしてみよう。何分でできるかな」

また、折り紙が全員に配られた。

「それでは、準備はいいですか？ 始めますよ」

「ひとみちゃん、大丈夫ですか？」

「大丈夫！」

「よし、時間を計るからね。ちょっと待って……。5、4、3、2、1、スタート！」

まことは、紙を折る所はゆっくりやって、うまくできたと思った。

組み立ては、さっきよりは少し早くできたけど、最後で外れてしまった。

「できたー！」

けいた君が叫んだ。

「2分45秒」

白木隊長が言った。

「できたー！」

次はたかし君だった。

「2分50秒」

まこと君とけいこちゃんが叫ぶのが一緒だった。

「できたー！」

「できたー！」

すぐに、ひとみちゃんも叫んだ。

「3分6秒」

「みんな早かったね」

「もっと早くできるー！」

「慣れてきたんだね。今2つできました」

「はい、それでは的当てゲームをします。その前に手裏剣に名前とか印をつけてください。マジックペンを渡します。的当てゲームは、下北リーダーです」

下北リーダーが、壁の方に的を並べていた。箱の上にペットボトルがあった。

「いまから、手裏剣的当てゲームをします。その前に投げる練習をしてください。壁に向って投げて下さい」

そこで、居眠りをしながら見ていた寺田じいさんが、窓を見ながらぼつりと言った。

「あ、雨が降ってきたわ」

スカウトやリーダーたちも窓を見た。

ついに降ってきた。スカウトの顔が心配そうな顔に変わった。

「肝試しはどうなるのかなぁ」

みんなの心配する声が聞こえた。

でも、リーダーたちは、雨が降っても当たり前と思っている。

「雨は気にしない、気にしない」

「えー、嫌だなあ。このまま、ずっと降るの？」

けいた君が白木隊長の方を見て言った。

「雨はしかたがないからね。今は梅雨だから。去年も降ったし、その前の年も大雨が降ったよ。平気、平気。ビバレンジャーは平気で頑張ろう」

ことさら強調したのは、ボーイスカウトは雨を気にしない気持ちになってほしいという考えからである。

「そんなに言われても、雨は嫌だなあ」

「ご飯は外で食べるんでしょ。大丈夫じゃないよ」

「心配ないよ。屋根があるから。みんな、雨が降っても楽しくやろう」

まことは、「隊長はどうかしてるんだわ。僕たちの気持ちが全然わかってない」と思った。

このとき、白木隊長の携帯から大きな音が聞こえた。

みんなが、白木隊長の方を見て静かにした。

「あっ、団委員長。そうですか。わかりました。すぐ、そちらに行きます」

隊長の顔が笑顔に変わった。

「みんなお待ちせ！ イェーイ！」と叫んだ。

そこで、ビバ隊長が言った。

「ご飯ができたぞー！」

「イェーイ！」これは、リーダー全員が声をそろえた。

これを聞いて、お母さんたちはくすくすと笑った。

「そうです。いまから、すぐに移動します」

「的当てゲームは？」

「ちょっと時間が遅くなったから、今はしません」

「えー、やりたいのに、つまらんなー」スカウトたちから不満の声が出た。

「ごめんね。やりたいねえ。みんなのかっこいいところをみたいけど・・・うーん。ほんとにごめん。いまは、手裏剣を終わらせてね。はい、じゃあ、スカウトはビバ隊長の前に急いで集合してください」

隊長は、スカウトの楽しみを実現できなかったことを反省しながら、急いで移動準備を始めた。

スカウトたちは、飛ばした手裏剣を拾ってからビバ隊長の前に並んだ。

「ビバ隊長からもみんなに謝るわ、的当てゲームができなくなってごめんね。・・・はい、手裏剣はザックにしまいましょう。それから、ビバレンジャーバッジを持ってきて下さい。10秒で戻ってきて下さい。解散」

ビバ隊長は、10、9、8と数えている。

「なんか、急にどんどん言うけど、できないよ」

まことは、急いで動いていた。

「5、4、3」

スカウトたちは、何とか元の位置に並んだ。

ビバ隊長の横で、白木隊長がバッジをたくさん持っている。

「早く集合できたね。ビバレンジャーらしくなってきたね。じゃあ、バッジは2つ渡します。あ、さっきの森の美術館ができたから3つにします」

「やったー！」スカウトたちに笑顔が戻った。

こうしてバッジがどんどん増えている。

□ ビバレンジャー訓練その5（雨に負けるな夕ご飯）

第3小屋から、全員で雨の中を第1炊事場まで歩いた。途中で、ビバ隊長が歌いだした。

「大きなー」

すると他のリーダーが続けた。「大きなー」

「歌だよー」、「歌だよー」

「あの山のー」、「あの山のー」

「向こうからー」、「向こうからー」

簡単だ。同じように歌えばいい。歌詞は知らなくても歌える。8番まである「大きな歌」だ。

まことは、雨の中でも何とか楽しい気分させてくれる歌だなと思いながら、声を出していた。

普通の道から林の中に入ってくねくねと細い道を進む。前に電気で明るくなった炊事場が見えてくる。

「団委員長と川谷副長がいるよ」

その声で、後ろにいたまことは、元気が出てきた。それとお腹も空いているのを感じた。

炊事場は、屋根があるので雨には濡れない。

「いらっしゃーい！ もうできているよ。しっかり食べよう」

浜嶋団委員長の大きな声が迎えてくれた。

長いテーブルの周りに椅子が置いてある。土間はでこぼこしているので、椅子がガタガタして座りにくい。

その横は洗い物をする場所で、水道の蛇口が8個ぐらい並んでいる。

テーブルの上にホットプレートが3つ並んでいる。紙皿と箸が椅子の前に置いてある。浜嶋団委員長と川谷副長はまだ忙しく動いている。

夕食は、焼きそばとお好み焼きだ。

スカウトたちはどこに座ろうかとテーブルの周りに集まった。

白木隊長が、スカウトに指示した。

「スカウトはそちらの端から座って下さい。すわったらお皿と箸があるか確認して下さい。お母さんも隣に座ってください」

みんなが座ると、浜嶋団委員長が説明した。

「焼きそばはできています。お好み焼きはこれから焼きます。時間が遅くなっていますので、みんなのお好み焼き作りのお手伝いはできなくなっていました」

「ええー、やりたいよ」

「ごめんね。もう作ってしまったんだ」

浜嶋団委員長が、お好み焼きの準備をしながら言った。

「ごめん、ごめん。焼きそばを配るよ」

白木隊長も謝りながら、すぐ食べ始めることにした。先に焼きそばがお皿の上に盛られた。焼きそばは、お好み焼きの待ち時間で食べることにして、先に出来上がっていた。お好み焼きは、小さく焼いて、お代わりが何度でもできるようにしている。

「では、ご飯の歌を歌いましょう」

大きな歌声がわっぱの森に広がった。

「いただきま〜す」

「さあ、食べるぞ」

全員が食べ始めた。浜嶋団委員長と川谷副長は、お好み焼きをせっせと焼いている。

「お好み焼きが焼けてきたから、ほしい人はどんどん食べてください。2つのホットプレートで焼いています」

「大阪焼きですよ。ソースもマヨネーズもあるからね」

片方のホットプレートを担当している吉川団委員が言った。

みんなは、何回もお代わりをした。

「まだ余っていますよ。食べてください」

食べ終わったスカウトは、席を立てうろうろしだした。

「隊長、もう、お腹いっぱい」

「もう、無理だー」

浜嶋団委員長は、かなり頑張って食べていたが、

「隊長、ビバ隊長、坂本副長。はい、出番ですよ」

と若手リーダーに声をかけた。

「それって、何の出番ですか」

ビバ隊長が質問する。

「今から、晩御飯の二次会を始めます。いっぱいありますから、どうぞ」

「何、それ？ 拷問みたい」

「アハハ、拷問風お好み焼きです」

「へえ、おいしそうですね。団委員長からどうぞ」

「よし、言いましたね。全員で一切れずつ食べようね」

「ほんとですかー、うそー。結構お腹に来てますよ」

坂本副長が苦しそうに反論した。

浜嶋団委員長は、それを気にせずに涼しそうに続けた。

「夜食はありませんから、さあ、食べておきましょう」

リーダーたちは、しかたなくもうひと切れずつ食べた。

「あー、きれいに片付けました。ありがとうございました」

川谷副長が、うれしそうに言った。

ご飯の後は、お風呂だった。

お風呂組と夜プログラム準備組と後片付け組に分かれた。夜プログラム準備組は、すぐに第3小屋に戻った。

白木隊長とスカウトと保護者は、管理棟まで一緒に歩いた。管理棟の中に入り、男と女に分かれた。

男湯には、スカウト3人と隊長の4人が入っている。

たけし君が話しかけた。

「隊長、肝試しはできないよねー」

「雨が止まないといけないからね。止みそうもないね」

「じゃあ、何をするの？」

今度は、けいた君が聞いた。

「今、第3山小屋で準備をしていると思うよ」

「誰が？」

まことも気になるようだ。

「他のリーダーがお風呂に入らずに準備している」

「ねえ、それで何をするの？」

「キャンプファイヤーかな。小屋の真中で火をつけてね」

「小屋の中でできるの？ だって、火をつけたら火事になっちゃうじゃない」

「どんなふうになるか楽しみだね。隊長もわからないよ」

「ふーん」

「みんな、しっかり体を温めてね」

□ ビバレンジャー訓練その6（森の神様は誰だ）

お風呂に入ったメンバーは、管理棟で全員揃ってから第3山小屋まで、下ってきた道を戻った。トイレに街灯が点いているが、そこから先は真っ暗だ。まだ、雨は降っていた。たくさんの懐中電灯であちこちを照らしながら進んだ。

小屋の電気が消えていた。

外を歩く音や話声が聞こえたのか、小屋の中から下北ビバ隊長が出てきた。

「お、リーダーだ」

「中に入ってください」

すると電気が点いた。

入り口で靴を脱いで入っていくと、リーダーたちがファイヤーを中心に丸くなって座っている。藤橋副長、寺田副育成会長、吉川団委員、坂本副長、川谷副長が並んでいる。

ビバ隊長は、静かな声で言った。

「肝試しの代わりにキャンプファイヤーを行います。荷物を置いたら、ファイヤーを中心にして、座って下さい」

リーダーたちは黙って座ったままだ。スカウトたちは、少し緊張感が漂っているのを感じていた。

まことは、「あの真ん中にあるやつか。木が組んである。あれを燃やすのかな。危ないぞ」と思った。

ビバ隊長が、また小さな声で言った。

「スカウトとお母さんは、一緒にリーダーの隣に座して下さい」

小屋の奥に折りたたみの椅子がファイヤーに向いて一つ置かれてある。

「あの椅子は何？」

「シー、あの椅子は、あとから森の神様が来て座ります」

「森の神様？」

「うん、楽しみにしようね。さあ、準備ができたね。静かに待って下さい」

そして、電気が消された。3つの小さな窓の外がわずかに明るい。部屋の中は真っ暗だ。全員が黙っている。静かになって緊張した雰囲気になった。

「暗いね。誰が来るのかな」

ぼそぼそと声が聞こえた。

入口の外から砂利を踏む足音が聞こえてきた。

「来た！」

「シーー！」

ドアが開いて、白っぽい着物を着た人が入ってきた。静かに影のように動いて行く。スカウトの後ろを通って椅子の前で止まった。

静かな声が聞こえた。

「私は、わっばるの森の神様である」

まことは、思った。

「この声は、団委員長だ。だって、団委員長はいなかったもん」

「今日は、豊中2団のビーバー隊が遊びに来ると聞いて、一緒に楽しませてもらおうと思ってやってきました。一緒に遊んでくれますか？」

誰も返事をしない。

まことは、顔を見ながら、小さな声で「いいよ」とつぶやいた。

「それでは、皆さん、立ってください」

真っ暗な小屋の中で、全員が立った。

神様の声が小屋いっぱいに響いた。

「それでは、ファイヤーに点火します。点火！」

組んだ薪の中が赤くなって、火が揺れているのが見えた。

「もえろよ、もえろよ、ほのおよもえろ・・・」

ビバ隊長が歌い出した。ビバ隊長がエールマスターだ。キャンプファイヤーの進行を行う。他のリーダーも歌い出した。

まことやスカウトたち、お母さんは、黙って聞いているだけだった。

スカウトたちは、珍しそうにじっとファイヤーを気にしながら見ていた。赤いのは布だった。風でゆらゆらしている。ほんとうの火のように感じる。

歌が止むと部屋が明るくなった。

ここからは、ファイヤーの助っ人のために呼んだ坂本副長の出番だ。

「はい、それでは、最初のゲームです。『落ちた落ちた』をします」

「落ちた落ちた」

「なーにが落ちた」

「雷」

ここで、両手でおへそを押さえる。りんごのときは、両手をつけて体の前で受ける構えをする。もう一つは天井。天井は、両手を頭の上に上げて手のひらで押さえる。

りんご、天井、雷、天井・・・を何回も繰り返した。誰かが間違っては笑いあった。

次のゲームが変わる。

「それでは、『アブラハムの子』をやります」

「それってなに？」

まことは、知らないゲームがどんどん出てくるのに一生懸命ついて行った。坂本リーダーは、歌い出した。

「アブラハムには 7人の子

一人はのっぽで あとはちび

みんな仲良く 暮らしてる

さあ おどりましょう

右手（右手）・・・」

「右手」と言うと、みんなで「右手」と言う。それから、右手を動かしながら、同じ歌を歌う。今度は、「右手」に「左手」を追加する。右手と左手を一緒に動かして歌う。こうして、どんどん増えて行く。左手の次は、「右足」、「左足」、「あたま」、「おしり」、「回って」と続いて行く。それぞれをすべて動かす振付だ。だんだんとしんどくなる。

「しんどいー。これはなにー」

全員が体を動かして大きな動きになる。苦しさが混じった笑い声がだんだんと大きくなる。

お母さんたちも一生懸命やっているので苦しそうだ。

「ハッ、ハッ、ハッ」

最後は、「おしまい」で終わる。

「ああ、疲れたわ。でもおもしろかった」

森の神様も踊っていた。

次は森の神様が歌うことになった。「山賊の歌」だ。

「雨ー」、「雨ー」

「が降れば」、「が降れば」

「小川ー」、「小川ー」

神様が歌った歌詞と同じ言葉で繰り返す歌だ。

まことは、「大きな歌」と同じだなと思った。

それで、体を動かしたり、手をたたいたり、楽しい時間が続いた。

急に、エールマスターが、ハミングを始めた。他のリーダーも小さな声で合わせた。

そして、小屋の明かりが静かに消えた。真中にあるファイヤーの明かりだけになって、全員が火を見つめた。

森の神様が静かに立ちあがった。

「楽しかったです。ありがとう。みんなはビバレンジャーになるために、いっぱい訓練をしてきたんだってね。とてもいいことをしていると思う。みんながわっばるの森を守ってくれるのは、すごくうれしいです。今日は安心して眠ることができます。また、遊んで下さい。さようなら」

それからドアの方に歩いていき、ドアの外に消えて行った。そのまま神様は帰ってこなかった。

また、部屋が明るくなった。

「みんな、どうだった。楽しかったですか」

白木隊長が、立ちあがってスカウトたちに聞いた。

「うん、楽しかった」と口々に言った。

「あの、ぶらぶらするの、おもしろかったよ。何て言ったかな？」

とまことが聞いた。

「アブラハムの七人の子だね」

白木隊長が答えた。

「そんなやつだよ。それが面白かった」

「そう。よかったね」

「もっとやりたかったわ」

そして、けいた君がみんなの知りたいことを聞いた。

「隊長！ さっきの人は、団委員長だよね！」

「団委員長でしょ」

「団委員長だよね」

いろいろ聞かれたけれど、白木隊長はとぼけた返事をした。

「森の神様のこと？ あれ？ 団委員長がいないねー」

「絶対、あれは団委員長だよー」

寺田副育成会長が、ひときわ大きな声で続けて言った。

「あれー！ そういえば、晩御飯を食べた後から全然見ていないねー。どこへ行っちゃたのかな。僕も団委員長を見ていないよ。どうしたんだろう」

そこで、ドアが開いた。

「こんばんは一。あれ？ もう終わっちゃたの？」

ドアを開けて入ってきたのは、浜嶋団委員長だった。いつもの服を着ていた。

「団委員長、どこに行っていたの？」

とけいた君が聞いた。

「ちょっとねえ、施設の人と話していて長くなっちゃった。何回も来ているから良く知ってるんだ。先週のプール清掃に来た時に担当していた人だよ。肝試しできなくてすみませんと言っていたよ」

「ほんとう？」

「ほんとうだよ」

「森の神様に会わなかった？」

「さっき、ここに来るときにすれ違ったよ。うれしそうな顔をしていた」

浜嶋団委員長は、一生懸命にごまかしていた。

スカウトたちは、はっきり答えを言わないかぎり、確信は持てないようだ。

これで、今日のプログラムは終わりのはずだった。

□ ビバレンジャー訓練その7（七夕の願い事は難しいぞ）

第1小屋で家族が寝るので、雨が降っている中、白木隊長とビバ隊長が、暗い道を案内している。

「真っ暗だ。懐中電灯でこっちを照らしてよー」

「怖いね」

「足元に気をつけてねー！」

雨で、空も林の中も真っ暗になっている。これ以上の暗闇はない。1人で歩けば、肝試しだ。誰もが、1人ではとても歩けないと思ったことだろう。

第1小屋を見つけたら全員がほっとした。

中に入ったら、テントが2つ用意されていた。

「ヤッホー！ テントだ。テントだ。僕はここで寝る！」

「ぼくも寝る！」

お母さんが聞いた。

「白木隊長、でも、いつの間にテントを立てたんでしょう」

隊長は、「あはは」と笑っただけだった。

スカウトは、昼間に無かったテントを見て、大喜びだ。ビーバー隊は、テントで寝ることは許されていない。しかし、小屋の中であれば問題ない。スカウトの希望からこれをするようにしている。

男子と女子で別れて、テントの中に入り込んだ。

「おいおい、まだだよ。その前にすることがあるから、筆記用具を持って集まって下さい」

隊長が言う言葉も耳に入らない。

スカウトたちはしばらくテントの中で暴れていた。

「そこにマットとシュラフを入れて寝るんだよ」

うれしくて、なかなか止まらない。

白木隊長はたまりかねた。

「集合！ 10数えるからね。10、9、8・・・」

女子は外にでたが、男子は、けいた君が「出よう」と言うまで、遊んでいた。

「筆記用具を持って、7、6・・・」

「いそげー！」

ビバ隊長がげきをとばした。

みんな、急いで筆記用具を持って、白木隊長の前に座った。でも、テントが気になってテントの方を見ている。

白木隊長とビバ隊長が短冊を出してきた。笹の木が入口に立てかけてある。

スカウトだけ白木隊長の前に並んだ。

「もうすぐ七夕です。すこし早いけど、七夕の願い事を書きたいと思います。イエーイ！」

リーダーは、まだ元気いっぱいだ。

「はい、みんなこれに願い事を書きましょう」

短冊が配られた。

「願い事なんかないよー、何を書いたらいいか分からない」

みんな、なかなか書かない。他の人の短冊を覗き込んで、笑ってばかりいた。

「早く書かないと寝れないよ。何でもいいから書いてみて」

スカウト同士で、見せあっていたけど、誰も書かない。

「ひとみちゃんが、何か書いているみたいだね」

と隊長が言った。

「えー、なにになに」

「まだ、書いてないよー」

ひとみちゃんは、左手で隠しながら鉛筆を動かしていた。

「みんなどうしたの？ 何も願い事はありませんか」

「ありませーん」

「ありませーん」

まことも同じことを言った。

「困りましたね。もう寝る準備をしたいね」

「同じでいいやん」

けいた君が言った。

「そうだ。そうだ。もう何も考えられへん」

「しょうがないね。とにかく全員書いて下さい」

まことは、ひとみちゃんの書いたことをそのまま書いた。他のスカウトも真似をした。そして笑った。

「それでは、短冊を集めます。持って来て下さい。じゃあ、これで七夕の願いを終わります」

その後は、下北ビバ隊長から説明があった。

「さあ、みんなよく聞いてね」

スカウトは、下北副長の方を向いた。

「スカウトは、テントの中にマットとシュラフを並べて下さい。それが終わったら、雨が降っているけど、歯を磨いたり、トイレに行ってください」

テントの中に、男子は3枚、女子は2枚マットを敷いてシュラフを並べた。。お母さんたちは、テントの外で寝る。広い小屋だから、テントの中の方が暖かい。雨戸は全部閉められていた。

まことは、たけし君とけいた君がテントの奥にマットを並べたので、入口近くにマットを敷いた。

「ここでいいや。出入りが簡単だ」

□ ビバレンジャー訓練その8（怖い話は平気と言うけれど）

もう寝ようよと言っているのに、浜嶋団委員長がやってきた。

「わあ、テントがある。いいなあ！」

スカウトたちは、中に入って隠れた。

「そうだ。写真を撮ろう。みんな、中に入ってこっちを見よう。撮るよー！」

はい、チーズ！ よしよし、2枚撮れた。

もう、寝る準備できたみたいだね。ちょっと待ってね。坂本リーダーが来たら寝ましょう。お風呂に行ってるから、ごめんね」

「何をしにくるの？」

けいこちゃんが言った。

「そうだね。今からお母さんたちとお話をするので、坂本副長にみんなの面倒をみてもらうためさ」

「わかった。じゃあね、それまで怖い話をしてくれない？」

「怖い話かー。肝試しができなかったからね。物足りないかい？」

「うん、怖くないよ」

けいこちゃんは、まだ寝たくないようだ。

「みんないいかな。団委員長の話は怖いよ。眠れなくなったら困るよ。けいた君は大丈夫かな」

「僕より、ひとみちゃんは大丈夫なの？」

「わたしも大丈夫だよ」

「そうか、そしたら話そうかなあ」

「お母さんも一緒に聞いてもらうね」

「うん。いいよ」

「ほんとうにいいね？ 泣かないでね。う～ん。どれにしようかなあ」

「とりあえず、で・ん・きーをけ・し・てーもらおうか。

この懐中電灯だけにし・よ・うー」

浜嶋団委員長は、自分が持ってきた懐中電灯を前に置いた。電気が消えたら、ちょっと暗くてよく見えなくなった。

「山であった話です。団委員長が昔に聞いた話です・・・」

・・・

2人で山登りに行った時のことです。山道を登っていると日が暮れてきた。早くテントを張れる場所がないかと細い道の横に平らな場所を探しながら登って歩いていると、道の右に小さなお墓があることに気づいたんだって。

こんなところにお墓って、変だよなーと2人で話をした。そして、また登り続けた。

しばらく歩くとちょうどテントを張れるぐらいの場所が見つかったので、2人はさっさとテントを立ててしまった。明るいうちに食事も簡単に済ますことができ、お茶を飲んでいるところで周りが暗くなってきた。

しばらく、話をしていたけど、早めに寝ることにしたらしい。

2人とも時間が早いせいか、なかなか寝付けなくてときどき眼が開いてしまった。外は風もなかったので静かだ。10時ごろになった・・・

「そうするとね。『かちっ、かちっ』という音が道の下の方から聞こえたらしいんだ。2人は、何か分からなかった。だけど、その音が少しずつ近づいてくるように思えた。

『かちっ、かちっ』、『かちっ、かちっ』ってね。

何の音かなあ。そういえば、さっきの道にお墓があったなあ」

まことは、ひとみちゃんが体を前後に動かしていることに気付いた。

「ひとみちゃん大丈夫？」

小さな声で聞いた。

「うん、大丈夫。でも、ちょっとお母さんの所に行くね」

ひとみちゃんは、お母さんの膝の上に座った。

浜嶋団委員長は、まだ、ゆっくり「かちっ」、「かちっ」と言っている。

なんだか重苦しい雰囲気になってきた。

ひとみちゃんの息をはく音が聞こえる。

けいこちゃんが、ゆっくり言った。

「こ・わ・い」

「かちっ、かちっ」

その声が大きくなっているように思えた。

まことも怖かったけど、黙っていた。

浜嶋団委員長は、けいこちゃんの声聞いて話す調子を少し早口にして、明るい雰囲気話を変え始めたようだ。でも、話は続けている。

「えー、その音はとうとう聞こえなくなったんです」

最後は怖くない話に変えたことがみんなに分かった。

でも、遅かった。

ひとみちゃんが、大きな声で泣き出した。お母さんの膝の上で声を出して泣いている。もう、泣き止まなかった。

「ごめんねー、そんなに怖かった。何もなかったんだよー。もう、音は聞こえなくなったんだからー」

浜嶋団委員長が、何を言っても泣き止まなかった。

まことは、あの「かちっ！」っていう音は、きっとテントまで歩いてくると思った。でも、その前に終わって本当によかった。

15分ぐらい、鳴き声は止まなかった。

そとから階段を登る音が聞こえた。

「こわー！」

ビバ隊長が大きな声を出した。

まことは、びくっとした。

「こんばんはー」

坂本副長だった。

「びっくりさせないでよ！」

まことが言った。

「どうかしたんですか？」

ひとみちゃんの泣く声が、ますます大きくなった。

男のスカウトは、テントの中に入って行った。

「団委員長が、怖い話をしたら、ひとみちゃんが怖くなって泣き出してしまったんだよ」

白木隊長が説明した。

「そうですか。どうでしょうね」

「この子は、まだ泣き止みません。すみません」

ひとみちゃんのお母さんが、説明した。

また、15分ぐらい経った。

「団委員長、坂本副長、今日はもう打ち合わせは止めにして、寝てもらいましょうか」

「そうだね。残念だけどそうしましょう」

「すみませんねえ」

お母さんが、謝っている。

リーダーが話しているのがテントの中のスカウトにも聞こえた。

「じゃあ、スカウトたち、おやすみ。またあしたね」

白木隊長の後で下北副長も声をかけた。

「またあしたね。みんな早く寝ましょう」

その後、白木隊長が突然、男子テントの中に顔を突っ込んだのでスカウトたちはびっくりした。

「まこと君、寝れるかな？ おやすみ」

まことは、真上の白木隊長に向かって言った。

「おやすみなさい」

これで、1日目のプログラムがやっと終わった。

まことは、雨で予定が変わったけれど、予期しないことがいろいろ起きたなぁと一日を振り返って眠りに着いた。

□ ビバレンジャー訓練その9（川遊びはやっぱり最高）

雨は朝から止んでいた。部屋の中は雨戸が閉まりまだ暗い。雨戸の隙間から光が部屋に射している。鳥の鳴き声も小屋の中に聞こえていた。

まことは、目が覚めるとドームテントの中にいることを思い出した。たけし君もけいた君もまだ寝ている。入口で寝ていたのも、そっとテントの外に出た。お母さんたちもまだ横になったままだ。そこで、パジャマを着たままいつものポーズをしてみた。両腕に力を入れて、腰を左右に振る。

「よしっ！ 今日も調子がいいぞ」

お母さんを目で探していると、そこに、にっこり笑う顔があった。

やがて、女性リーダーとして一緒に寝ていた川谷副長が、起床を伝えた。

「皆さん、起きて下さい。二日目の始まりです」

そして、全員でマットとシュラフを戻し、活動が始まった。

朝礼も朝食もどんどん進んでいった。

さあ、待ちに待った川遊びだ。

水着姿で川までぞろぞろ歩いて、川岸に到着した。

全員が興味深く、透き通った川の方を向いた。川の深さはそれほどなかったが、少し急な流れだった。

そこで、白木隊長が叫んだ。

「さあ、川遊びだぞー！」

「イエーイ！」

スカウトたちもリーダーと一緒に叫んだ。

リーダーが、スカウトの声でびっくりするほどの声だった。うれしさがその声にあふれていた。お母さんたちが笑っている。

「みんな楽しいかな。雨が止んでよかったね。去年は、雨で川遊びができなかったから今年は最高です」

「それでは、朝からクイズです。わっばるでは、この川で遊べるかどうかを判断する印があります」

「どこにあるの？」

たかし君が聞いた。こういうとき、まっさきに質問をするのはたかし君だ。

「隊長は、朝一番に、ビバ隊長とその印を見てきました。ビバ隊長！ 印はどこにあるでしょうか」

「はいー！ もう少し下の方に大きな岩があります。川の岸辺に近いところです。そこに印がついています」

「ありがとう。岩は川の中にあるのかな。これはヒントだよ。岩に線が3本掘ってあります。線に色もついています。何の線だろう。これがクイズです」

「わからないよー」

「どんな色ですか？」

けいこちゃんが聞いた。

「けいこちゃん、いい質問だなー。赤色とう〜ん……。これで安全かどうか分かります。さあ、どうかな？」

「水の深さだー！」

けいた君が言った。

「正解！ そうですね。川の水がどこまで来ているかで安全が分かるようになっています」

「へえ、僕たちでもわかるんだ！」

まことは、驚いた。

「はい。わかりましたね。次のクイズです。川を見てください。水が多いみたいだね。いや、少ない方かな。そこで、今日は川に入っても安全でしょうか。ビバ隊長、どうでしょう」

ビバ隊長が、白木隊長に合図で知らせた。

「わかりました。ええー、その前にビバレンジャーはどう思うかな？ 自分で観察して考えてみよう」

「はい！ 大丈夫です！」と、たかし君。

「はい！ ちょっとやばいです！」と、けいた君。

「じゃあ、正解を発表して下さい」

下北副長が、威勢良く聞いた。

「ファイナルアンサー？」

「さっきと同じ！」

たかし君、けいた君が口をそろえて言った。

「正解は、今日の水遊びはセーフ！ 大丈夫が正解です」

「みんな、よかったね。大丈夫でした。さあ、体操をするぞ！」

白木隊長が、笑顔で言った。

体操が終わった。まことには、秘密があった。上半身もスーツを着ていることだ。靴は川遊び用をはいてきた。他の人はTシャツだった。

川の流れはすこし速く、水は透明だ。しかし、この時期はまだ冷た過ぎる。

スカウトは、バディーで川に入る。まことは、浜嶋団委員長とバディーを組んだ。

バディーとは、水の中で安全に遊ぶために2人ひと組で行動する安全対策のことだ。

「冷たい！」

浜嶋団委員長は大きな声で叫んでいる。

「冷たい、冷たい、冷たい。早く向こうに行こう」

まことの手を引っ張りながら、向こう岸に上がった。

「団委員長、しゃべりっぱなしで煩いなあ」

「そうお。ごめんね。ああ、冷たかった。冷たかった。もうあかんわ」

「また、言っているよ」

最初の川渡りは、こんな調子で、とりあえず川を渡っただけだ。休憩している時間は無かった。まことは不満だ。

「まだ1回目じゃない。もう1回行こうよ」

他のスカウトとリーダーのバディーは、川の中を見ながらゆっくり歩いている。「若いリーダーとバディーだったらよかったなあ」とつぶやいた。

「まこと、なんか言ったか？」

「別に」

まことも、だんだん、冷たい水に慣れてきたけど、足が痛くなってきた。

2人は、何回も行ったり来たりした。流れが急で石も少し滑るところがある。まことは、水着を着ているのでお尻を付けても平気だ。団委員長は短パンをはいていて、水深が浅いからそれが濡れない。

しばらくすると隊長から、休憩の合図があった。

全員が川岸に上がり、川の方を眺めていた。

スカウトは退屈してきたので、ペットボトルで遊び始めた。ペットボトルに川の水を入れて、飛ばす。そのうち、まことは浜嶋団委員長の背中に水をかけるようにし始めた。

「冷た〜い！ こらっ、まことか！」

「逃げろ！」

「よし、俺にもペットボトルをくれ！ まことを許さんぞ！」

浜嶋団委員長は口では騒いでいるが、たいして動けなかった。

それから、離れたところで、ペットボトルに川の水を入れては、浜嶋団委員長に水を飛ばした。なかなか当たらなかった。浜嶋団委員長の水も届かなくて、体の近くで落ちた。

それで、2人はだんだんと近づいて、お互いにペットボトルを逆にしてじゃばじゃばとかけだした。浜嶋団委員長の茶色のTシャツは水で黒い色に変わった。

「もう、べちゃべちゃになってしまった。はあ、はあ。ちょっときついわ」

「まことは、寒くないか？」

「全然寒くないよ」

浜嶋団委員長は不思議に思って、スーツを見た。

「なんで？ あれっ、ちょっとこのスーツは何？ このスーツの中はあったかい。うそー！ ずるいわー！」
信じられない顔をして、すごい、すごいと何度も言った。

けいこちゃんも坂本副長に水をかけていた。坂本副長は、文句も言わずにかけられるままになっていた。
けいこちゃんは、最後には座りこんだ坂本副長の後ろから左手でTシャツの首を掴んだ。

「ワッハハハー！」

けいこちゃんは、うれしそうに笑っている。

右手のペットボトルを傾けて、背中から水をどぼどぼと入れた。

「もう、止めてー！」

坂本副長は、優しく体をねじらせるだけだった。

やがて、川遊びは終わりにになった。

「まこと、やっぱり自然の遊びは楽しいね！」

浜嶋団委員長は、自分が楽しかったみたいに、みんなに聞こえる声で言った。

まことは、いままでで川遊びが一番おもしろいと思った。

「川遊びは最高！ でも、相手が悪かった」

これを聞いて全員が笑った。

「スカウトと体が濡れたリーダーは、シャワーを浴びます。では、管理棟に戻ります」

「ビバレンジャー、しゅっぱ〜つ！」

隊長の号令で、ビバレンジャーは元気よく歩きだした。

□ ビバレンジャー訓練その10（最終認定試験）

いよいよ終わりが近づいた。シャワーを浴びて、着替えているときに、白木隊長が言った。

「お湯はあったかくて気持ちよかったね。さっぱりしたから、最後のテストだ。うまくできたらビバレンジャー合格です。藤橋副長が難しいテストを準備しているよ」

「えー。まだあるの？」

「昨日の夜に書いてもらった七夕の願いも叶えてあげたいからね」

スカウトが全員お風呂から出たので、お母さんたちも一緒にファイヤー場に上がっていくことになった。

「お母さん、これからビバレンジャーのテストがあるんだって」

「どんなテストをするの？」

「それは聞いていない。でも、どんなことでも頑張ってビバレンジャーになるよ」

「頑張ってね」

やがて、第2ファイヤー場の入り口に着いた。

「まだかな、ちょっと見てくるから、ここで待っていてね」

細い道を白木隊長が、走りながら上がって行った。

林が重なって、ファイヤー場の様子は見えない。

「けいた君、もう終わっちゃうのかな。もう少しここで遊びたいね」

「まこと、まだなんかあるから、心配するなって」

白木隊長はすぐに戻ってきた。

「今、準備ができました。ここでは、ビバレンジャーの最後の仕上げのテストをします。みんな、頑張ってください」

「隊長、何をするの？」

「それは、上に上がると分かります。それよりも、ここからは、一列できちんと歩いて下さい。お母さんたちは、スカウトの後ろからついてきて下さい」

広場に出ると、左側に長いロープが張ってあった。昨日のロープの3倍の長さだ。

「すごいなあ！」

「あれ、渡るのかなあ？」

「おもしろそう」

「早く渡りたい」

みんな自信があるような言い方をした。まこともできると思った。

藤橋副長、浜嶋団委員長、寺田副育成会長が前に並んだ。

「はい、このロープは、ビバレンジャー訓練の合格を決める綱渡りです。昨日よりも長くなっています。難しいですけど、勇気を持って挑戦して下さい。

君たちは、この2日間でビバレンジャーの修行とビバレンジャーのおきてを守る使命をはたすことができ

ました。そこで、君たちの本当の力をここで見せて下さい」

「渡れなかったらどうなるの？」

「はい、そうですね。各自は渡れるように努力をしましょう。途中で落ちたら最初からやり直します。元気に返事をすると力がつきますよ」

「たけし君！」

「はい！」

「よろしい、ちゃんとおきてを守っているね。頑張ろう」

ロープが長いから、昨日よりもたくさん沈みこむ。でも、なんとか渡れそうだ。

「できました。合格です！」

「よっしゃー！」

たけし君は、うれしそうに笑った。

「けいた！ 大丈夫だ。ロープをしっかりと持って進め！」

けいた君は、励ましのエールに力をもらった。

「おう！」

「次は、けいた君！」

「はい！」

まことはどきどきしてきたが、二人の渡り方を見ているとやり方が分かったようだ。

「まことも頑張れ！」

渡り終えたばかりのけいた君とたかし君が、一緒になって励ましてくれた。

「まこと君！」

「はい！」

昨日とほとんど変わらなかった。体が倒れないようにまっすぐにしてゆっくりロープの上を歩いていった。

「頑張れ、頑張れ！」

けいた君とたかし君が、終わりの方で大きな声援を送ってくれた。

「やったー！ これでビバレンジャーだ！」

まことは、大きな声を出した。あとは、みんなでけいこちゃんとひとみちゃんの応援をした。

お母さんたちは、最後になってきてわが子が逞しくなったような気がした。そして、スカウトたちの互いに励ます姿からこの2日間で結束力が高まってきたのだと満足しているようだった。

「みんな、元の位置に戻ってください。これで全員合格です。あとからビバ隊長から、合格証を渡してもらいます」

まことが聞いた。

「隊長、ビバ隊長はどこにいるの？」

白木隊長は、ちょっととぼけて返事した。

「そうだね。ちょっと準備しているかな」

□ ビバレンジャー訓練その１１（願い事は叶えられるか）

「集合！」

白木隊長が、ファイヤー場の中央に立って声を出した。

そこには、火を燃やす中心のところに昨日の雨でできた水溜りがあった。

リーダーが少なかったので、浜嶋団委員長は後ろでカメラを持って見ている。スカウトだけが、白木隊長の前に並んだ。

「お母さんたちもこちらに来てください」

浜嶋団委員長が、声をかけた。藤橋副長は、まだ後片付けをしていた。

「さて、君たちの願いを叶えてあげよう」

「え、昨日の願い事？ そんなことできるの？」

「隊長、あれは、難しいよ」

「そうだよ。できないよ」

でも、隊長は自信たっぷりに話した。

「そうなんだ。難しい。とても難しい願い事でした。でも、大丈夫です。隊長はできないから、願いを叶えてくれる人にお願ひしました。それでは、出てきてもらいます」

白木隊長が、スカウトたちの後ろの方に手を上げると、変な服を着た二人が立っていた。

「何？」

「何だ？」

「あれは、彦星さんと織姫さんです！」

「えー！！ うそー！」

「なんだよ、おもしろいなあ！」

スカウトとお母さんたちが驚きの声を出した。

青いタオルを頭に巻いて、短い着物を着ているのが彦星で、短冊を取り付けた笹を持っている。もう一人は、白い着物を着て金髪のを揺らしているのが織姫のようだ。

少しの間、ここからいなくなっていた坂本副長の彦星とビバ隊長の織姫だ。

「僕は彦星で、彼女は織姫です。君たちの願い事は私たちに届きました。願いを叶えるためにやってきました。僕と織姫が本当に会うのは明後日の7日の夜だけど、ちょっと願いを叶える練習をするために一緒にここにやってきました。

それでは、願いを叶えましょう。織姫から説明します」

すかさず、たかし君が口を挟んだ。

「どうやってするの？ 願って『長生きすること』だよ」

「私は織姫です」

「男じゃないか。織姫は女だよ」

けいた君が、突っ込んだ。

「私たちは、男も女もありません。では、願いは『長生きすること』ですね。みんなを『長生き』にしてあげますよ」

「ほんとう！ できたらうれしいなあ」

まことの反応はすなおだ。

「はい、では、ゲームを始めます。じゃんけんをしてもらいます。最初は、全員亀になります。亀のかっこうをしてください。はい、地面をはいはいしてもらいます。

亀と亀はじゃんけんができます。亀で勝ったらウサギになります。耳のかっこうをしてジャンプして下さい。簡単ですね。ウサギ同士でじゃんけんしたら、勝ったウサギは、くまになります。

次はよく聞いて下さい。くまとくまで勝ったら、木になります。長い木になります。まっすぐ立っていて下さい。動かないでください。

いいですか。団委員長もお母さんも参加して下さい。始めるよ。始めー！」

まことは、すぐ前にいるけいこちゃんとじゃんけんして勝った。ひとみちゃんのお母さんがウサギになった。まことは、そこへジャンプして行った。

「負けたー！」

ほかにもうさぎが出てくる。つぎのうさぎは、浜嶋団委員長だ。今度は勝った。

くまは、まだ見つけれないので、周りを見回した。くまのけいた君がいた。

「けいた君、やろう」

しかし、負けてしまった。

「長い木になったー」と、けいた君が立ちあがった。

次は、くまになった浜嶋団委員長とじゃんけんをする。

「やっど、勝ったぞー」

まことも、けいた君を見ながら、同じように立ったままじっとした。

長い木が増えてきた。

「終了ー！」

ほとんど全員が立っていた。スカウトは全員が長い木になった。

「さあ、皆さん、願い事を叶えてあげました」

「どうしてー？」

「うそだー！ なんでー！」

スカウトたちには何のことかわからないようだ。

「みんなが長生きしたいと言っているので、長い木になってもらいました」

「何のことかわからないよー」

まことは、織姫に言った。

「わからないかな。よく考えてください。みんなは、今長い木になりました。長い・木は、長生きになります」

「なにー！ 長い木が長生きー！ ハハハハハ」

みんなで笑った。

ビバ隊長の織姫は、まだ説明を続けた。

「もう少し聞いてね。はい、はい、静かにして！

みんなが自然を大事にすると自然は長生きします。ビバレンジャーとしても頑張りました。自然が長生きするとみんなも長生きできます。なぜかわかるかな？

自然はみんなの身の周りにいっぱいあります。皆のごはんになったり、吸う空気を作ってくれたりします。自然が無くなってしまうと、食べ物が無くなったり、空気が無くなってしまう。みんなはこれからも自然を大事にすることで、みんなも長生きすることができるようにしましょう。

じゃあ、僕たちは、明後日またみんなの頭の上に輝くことにします。さようなら」

「彦星さん、織姫さん、ありがとう」

白木隊長がお礼を言った。

歩き始めた二人に、カメラを持った浜嶋団委員長が言った。

「あ、ちょっと待って、スカウトと記念撮影をさせてください。そのかっこうおもしろいから一緒に写真を撮らせてください」

おもしろいと言ったので、みんなが笑った。

吉川団委員がカメラを受け取って、写真を撮ってくれた。

「じゃあ、本当にありがとう。みんなでお礼を言いましょう。ありがとう」

「ありがとう！！！」

「さようならー、長生きしてねー」

と言いながら、なぜか二人は大急ぎで広場をかけ上がって行った。

□ ビバレンジャー訓練その１２（やり遂げたスカウトたち）

スカウトは、白木隊長の前に一列に並んだ。お母さんたちは、後ろに並び、リーダーたちは、白木隊長の横に立った。

「楽しい舎営は、そろそろ終わりです。全員ビバレンジャーの最終テストに合格しましたね。おめでとう。

みんないい顔してるね。それは、やり遂げた顔だと思います。昨日の綱渡りで、自然戦隊ビバレンジャー

になってから、いろいろな訓練をやってきました。そこで、ビバレンジャーのおきてを守ることができました。

大きな声で返事ができたね。

自然も大切にしたいね。

集合は早かったね。

君たちは、昨日の朝よりも成長しました。成長の証に合格証を渡します。

そして、リーダーたちは、とても楽しく遊ぶことができました。ありがとう。

それでは、ビバ隊長からビバレンジャーの合格証を渡してもらいましょう」

ところが、ビバ隊長はまだ戻っていない。さっき走っていったままだ。

「どこに行ったのかな。じゃあ、帰って来るまで歌を歌いましょう。『手のひらに太陽を』です」

スカウトたちは、これが最後になるかという思いで、生き生きとして歌っているのが感じ取られた。

「みんな、気持ちよく歌えたね」

やがて、上の方から走る音が聞こえてきた。

制服に着替えて戻って来る2人を見つけて、スカウトたちが声を上げた。

「あ、ビバ隊長だ！」

ビバ隊長は、いつものサングラスをしている。やっとみんなの前に現れた。しかし、別れの時が近づいていることを誰も知らない。

「では、ビバ隊長、ご苦労様でした。最後にビバレンジャーの合格証を渡して下さい」

「はい！」

ビバ隊長は、白木隊長に敬礼して、合格証を受け取った。

白木隊長と入れ替わって、ビバ隊長がスカウトの前に立った。

「ビバレンジャーの隊員たち、よく頑張ったね。雨が降っても平気な気持ちで遊べました。怖い話にも慣れました。冷たい川の水にも負けなかった。なによりもビバレンジャーのおきてを守りました。偉い！ そして、ビバレンジャーの訓練で、優しい気持ちと強い心ができました。ビバ隊長は、みんなのビバレンジャーを誇りに思います。立派なビバレンジャーになってくれて大変うれしいです。ありがとう。ビバ隊長は、この合格証を渡したら、次のビバレンジャーの訓練に行きます。いつかまた、会いましょう！」

「えっ、どこかへ行っちゃうの？」とまことはつぶやいた。

それから、ビバ隊長は一人ずつ合格証を渡した。

スカウトたちは、ビバ隊長から合格証をもらいながら心配していた。ビバ隊長がほんとうにどこかに行ってしまうのかと思っている。そして、みんなが少し寂しい気持ちになっていた。

まことは、思い切って聞いてみた。

「ビバ隊長！ もう戻ってこないの？」

「そうなんだ。どこか別のところへ行くことになっているんだよ。ごめんね。でも、どうかな？」

白木隊長の方を向いた。

「白木隊長、まこと君が心配しています。私のつぎの訓練派遣先はどこになるのでしょうか？」

「そうか。まこと君、それは心配無用だ。ビバ隊長を辞めて、ビーバー隊の副長に戻ってもらうことになった」

「まこと君、心配してくれてありがとう！　ということで、サングラスを取ります」

「下北副長だ！」

「なんだあ、心配することはなかったよ」

まことは、一緒にいることになってほっとした。

他のスカウトたちにも笑顔が戻った。

最後に白木隊長が全員にわっぱるの山に感謝しようと話し出した。

「これでわっぱるでの舎営がほぼ終わりましたね。後は昼ご飯を頂いて帰るだけです。これでこのキャンプ場に戻ってきません。そこで、みんな目をつぶって昨日から2日間のことを思い出してごらん」

スカウトたちやお母さんは静かに目をつぶった。

「広場で遊んだこと、第1小屋で遊んだこと、第3小屋で遊んだこと。楽しいことをいっぱいしたね。わっぱるの山にお世話になったね。炊飯場にもお世話になったね。わっぱるの山や川に楽しい思い出をもらったね。お世話になったことに感謝しましょう。わっぱるの山に全員でお礼を言いましょう。それでは、ビバ隊長に合図をしてもらいましょう」

ビバ隊長の下北副長がみんなの前にでくると全員が目を開けた。みんな黙って下北副長の動きを見ている。

まことは、何が起きるのかドキドキしてきた。去年参加したたけし君とけいた君を見ると、平気な顔をしていた。

「それでは、全員あちらの高い山の方を向いてください。『ありがとう』の後にビーバーを3回一緒に言いましょう。

わっぱるの山ー、二日間遊んでくれて　ありがとう！」

「ビーバー！　ビーバー！　ビーバー！」

みんなの大きな声がキャンプ場の周りの木々に反射して響いて戻ってきた。

まことは、なんか「じーん」と熱い思いが胸に湧いてきた。

ボーイスカウトが自分たちのお世話になったキャンプ場に感謝の気持ちを表すセレモニーだ。忘れ物は残さず、残すのは感謝の気持ちだけと言われている。

こうして、まことが初めて参加した舎営が終わった。

まこととお母さんは、3時には家に戻ってきた。お父さんは、まだ帰っていなかった。

「お母さん、お父さんは、今日は早く帰ってくるの」

「そうね、ご飯の時間までには帰ってくるって言っていたわ」

「ピンポーン！」

まことは、チャイムが鳴るのを聞いて、大きな声を出した。

「あ、お父さんだ！」

玄関まで出迎えたまことに、お父さんがにこっとしながら言った。

「お、帰っているね。楽しかったかい？」

「うん。楽しかったよ。このビバレンジャー合格証をみてよ」

「すごいな。よく頑張ったね。じゃあ、ちょっと着替えてくるからな」

この後、3人は夕食を食べながら、いつものように楽しい話で盛り上がった。

第4話 まこと、ボーイスカウトの活動に感動する

9月は、ボーイ隊とベンチャー隊の上進式があり、その後は、報告会だ。一年間の活動の報告を各隊で行う。それに、今年は世界ジャンボリーに参加したのでその派遣隊の報告も用意されている。

久しぶりの隊集会だから、まことは、元気いっぱいだ。

「おはよう、お母さん。今日はスタンプをするんでしょ」

「おはよう。そういう連絡だったわ」

「でも、何も練習していないんだよ」

「そうだね。それでもできるのかな。リーダーに任せておけば大丈夫でしょ」

「よし、頑張るよ」

と言って、両腕に力を入れて腰を左右に動かした。

「それを見ると、お母さんも安心よ。頑張ってね」

□ 仲間づくりに英語を使う？

熊野田会館に2団が全員集まった。2階のホールは舞台が付いている。フロアーに椅子が並べられた。ビーバースカウトが最前列に座り、カブ隊、ボーイ隊、ベンチャー隊、保護者の順番に座った。

いつものように開会式のセレモニーの挨拶から始まった。

浜嶋団委員長の挨拶は、最初から英語で話したので全員が驚いた。メモを見ながらであったが、ゆっくりとはっきりと声を出していた。英語の後は、日本語でも話した。スカウトたちがわかるようにするためだ。

まことは、英語はわからなかったけど、一生懸命聞いていた。後ろに座っているお母さんは、ふんふんと顔を縦に振っていた。「まことはわかるかな」とまことの様子を見ていた。

途中から日本語だけになり、以下の話をした。

1つ目は、2団は英語を使う団にしよう。ドイツスカウトが来た時も英語で挨拶をしている。ビーバー隊の隊集会でも簡単な英語を使うことで仲間が増えるだろうと言っている。

2つ目は、各隊と団はかっこよくなるだろうということ。スカウト、指導者、保護者がかっこよくなれば、必ず仲間が増えると信じていると話した。

まことは、ビーバー隊で簡単な英語を使うってどういうことかなと思った。

まことのお母さんは、ビーバー隊で集合する時、いつも競争していることは、隊がかっこよくなるために、浜嶋団委員長がやっていることだと気がついた。そして、ビーバー隊はもう十分かっこよくなっていると思った。

□ 世界スカウトジャンボリーは、こんなに楽しかった

厳かな上進式の後には、第23回世界スカウトジャンボリーの報告が始まった。

世界スカウトジャンボリーに派遣隊で参加したリーダー2人とスカウト3人が登場してきた。

「ただいまより、世界ジャンボリー派遣隊の報告を行います」

豊中地区の大阪まちかね隊40名の副長として参加したボーイ隊の吉川副長が、代表で挨拶をした。

同じく副長として参加したカブ隊の阪上副長だけが、世界ジャンボリーで着用した新制服を着ており、残りの参加者は従来の制服を着ていた。

吉川副長は、パソコンで説明を始めた。出発前の準備集会のときから順番に説明している。

「それでは、全体をビデオにまとめましたから見てください」

そう言うと、スカウトと一緒に控室に消えてしまった。阪上副長が一人残った。

「ええー、私が解説をします」

ちょっと頼りなさそうだったが、なんとか説明をした。

まことは、吉川副長たちが何をしているのかが気になってしかたがなかった。隣のけいた君に小さな声で聞いた。

「けいた君、控室に入った人は何をしてるのかな。着替えているのかな」

「そうじゃないかな」

これを聞いて、少し落ち着いた。

ビデオは、大阪まちかね隊が山口に到着するところに進んでいる。

「大阪まちかね隊は、夜行バスで朝早く開場に到着しました。ここは日本ではなく世界でした。そこに一番乗りをしました。この広い草原には今は何もありません。それが、見る見るうちにテントが立ちあがり、一日でテントの町ができてしまいました。3万4千人が集まったのです」

広場の中にテントがどんどん立てられていく。

「すごいなあ！」

会場から、この景色の変わりようにびっくりした声が上がった。

まこともビデオに集中して見ていた。

「それに、早く到着した私たちは、外国隊のテントを立てるお手伝いもしました」

「へえ、頑張っているんだなあ」とまことは思った。

キャンプサイトの翌朝のきれいな空が映された。8月6日に広島に行ったことや秋吉台の鍾乳洞を見学したことも続いて紹介された。鍾乳洞の中は夏でも寒いぐらいだってことや大阪まちかね隊の周りは外国隊のテントばかりで、すごく楽しそうな様子が映された。

「この日は、イギリス隊と交流する予定だったのですが、イギリス隊からドタキャンの連絡が来てしまいま

した。そこで、みんなで相談して日本らしい縁日をすることにしました。外国スカウトにお茶を振る舞うお店を作ったんです」

縁日の看板を筆で書いている様子が映し出されていた。

「筆の得意なスカウトがいたので彼が書いています」

お茶を飲むときに座る赤色の台なんかもみんなで作ったりして、楽しそうにしている。

「みんな、すごいな」

一日でサイトの中に手作りのお店が作られていく。縁日の看板がゲートに掲げられ、お客もたくさん来ていた。

「このときが、一番仲間意識が高まっていました」

今度は、外国隊のサイトに訪問している写真が映された。

「私は、タイのサイトに隊員を連れて行って、そこでおいしい昼食を食べさせてもらいました」

阪上副長は、大学からタイに研修に行ったことがあり、タイで先生をしたいと考えているぐらいなのでタイ語は得意だ。

ビデオが終わったら、吉川副長とスカウトが、新しい制服を着て登場した。

「やっぱりそうだった。全員がそろそろカッコいいなあ」とまことは、また、けいた君に話しかけた。

スカウトは、1人ずつ感想文を読んだ。ボーイ隊の多田君は、用意してきた原稿を読みながらすべて英語で感想を発表した。日本語の説明はなかったので小さなスカウトには、ちんぷんかんぷんだった。それにしても、英語の発表は世界ジャンボリーのお陰である。多くの人が驚いていた。ベンチャー隊の2人もところどころ英語で話している。なかなか発音がいい。

スカウトたちは、英語ができるのは当たり前になっているようだ。

浜嶋団委員長が、「2団は英語を使う団にしよう」と言ったことがすぐに実現されている。

吉川副長は、ジャンボリーが楽しくてたまらない。ジャンボリーの期間で、3回も往復している。社会人になったばかりで連続して参加できなかったのだ。開会式には個人で参加して、それから後半に副長として参加することになり、その途中でまた仕事で会社に戻らざるをえなかった。笑顔がいっぱいでとても楽しそうだ。グルメハンターであのおもしろかった「ウマイ・ピザーラ」をやった指導者だ。

□ ホームスティの報告

浜嶋団委員長のところにドイツの男子スカウトがホームスティをしたのは、ご存じのとおりだ。女子スカウト2名もボーイ隊の女子スカウトの家にスティをしている。まず最初に、ボーイ隊の遥隊員のお母さんが、パソコンで写真を映しながら説明をした。

「2人の女子スカウトは、キャロラインとジェシカという女の子です。2人が決まってから、ドイツからすぐにメールを貰いました。写真も送ってくれたので安心できました。メールは、ドイツ語ではなく英語です。

私たちもこちらの紹介を送り返しました。それと、出発したところにジェシカのお父様からメールが届きました。とても心配している様子が分かりました」

メールの文章に簡単に日本語のタイトルを付けた資料を順番に示しながら説明した。また、地図を表示して次の話を続けて行く。

「2人が住んでいる町はフランクフルトの近くのニーダーハウゼンという人口1万2千人ぐらいの町です。2人の家はお向かい同士だって、いいですね。この航空写真を見ると、町の周りに緑地がたくさんあって田園地帯の住宅地です。とても羨ましい環境です」

次は、大阪空港にドイツ隊のバスが到着したところから始まった。2団の出迎えに行った浜嶋団委員長や加藤育成会長も含めて、男子スカウトと一緒に記念写真が撮られた。

「ホームスティの2日目は、カブ隊の歓迎会に参加しました。ドイツの歌を歌ったり、昼ご飯を食べさせてもらって楽しかったです。昼からは、娘の友だちと一緒に7人で箕面の足湯に行きました。それから、滝まで歩いて行ってしまいました。とても涼しくて、キャロラインとジェシカに喜んでもらいました」

まこと君は、「ぼくも行ったからよくわかるよ。あそこは涼しいんだ。とてもいいよ」と思った。また、そのとき、初谷に行ったことを思い出した。

「夜は、家に女子だけ12人が集まって、大女子会になりました」

写真には、手巻き寿司、焼きそば、唐揚げ、チキン、たこ焼き、どら焼き、わらび餅まど、みんなが持ち寄った豪華な食べ物が映された。12人の笑顔の写真も表示された。

それから、寝る前に浴衣を着せてあげる写真があった。

「交替で浴衣を着てもらい、写真を撮りました。このうれしそうな顔を見て下さい」

キャロラインとジェシカが、ほんとにうれしそうな顔をしている。

ホームスティは、これで終わりになる。

「最後の大阪駅のお別れで記念写真を撮ってもらいました。この後で、この子が泣いてしまったんです。ジェシとキャロも泣き始めました。やっと打ち解けてきたところでお別れになってしまうんですね。2人が、ずっと最後まで付き添ってくれて、ほんとに優しい女の子たちでした」

涙を浮かべた遥隊員の顔が大きく映った。

会場も、ジーンとした雰囲気でも包まれた。

さらに、家で2人を思い出しながら、寂しそうにしている遥隊員の顔まで映された。

「ホームスティが終わっても、自分の部屋でこんな顔になりました。なぜか寂しい気持ちでいっぱいでした」

これで、お母さんの発表が終わった。

時間は11時55分になっていた。次は、浜嶋団委員長の番だ。

「時間が5分しか残っていません。それにしてもビーバースカウトとカブスカウトは、お行儀よく聞いていましたね。とても偉かったですね」

浜嶋団委員長は、ビーバースカウトとカブスカウトが、長い発表時間をじっとしたまま聞けるかどうか心

配していた。その心配がいらぬほどおとなしく集中していたことをすかさず褒めてあげたのだ。そして、続けた。

「それでは、12時に終わりにしたいですが、あと5分だけ時間をください。それで私に発表させてください」

浜嶋団委員長は、要領よく話をして本当に10分で説明を終わらせてしまった。

「ちょっと説明が早すぎて無理がありましたけど、終わります。それでは、これから昼食にします。各隊の隊長の指示に従ってください」

白木隊長は、ビーバー隊が座っていた場所あたりで、椅子を円状に並べて一緒に食べることを指示した。後ろからお母さんたちが移動してきてその輪に参加した。

まことは、隣に空き椅子を用意して、「お母さん、ここだよ」と後ろにいたお母さんと呼んだ。

「まこと、発表を聞いてどうだった？」

「うん、世界ジャンボリーってすごいね。ぼくたちもドイツスカウトと交流できて良かったよ。団委員長の発表時間が長かったらもっと僕たちのことも説明できたのに、ちょっと残念」

「そうね。お母さんは、遥ちゃんのお別れの説明で少し涙が出ちゃったわ」

白木隊長の掛け声でご飯の歌が始まった。

□ ビーバー隊の舎営報告はスタンツで

昼ご飯の後は、各隊が1年間の報告をする。これは、毎年行っているプログラムだ。

報告会の初めに、浜嶋団委員長が前に出てきて、全員にこんなことを言った。

「2団の目標の1つとして、かっこよくすることがあります。そこで、今回の団行事から各隊でかっこよさを競争してもらいます。優秀な隊を『かっこつけま賞』として表彰します。

審査は、保護者の方10名にお願いしています。審査委員長は、加藤育成会長です。ただし、この賞品は、『名誉』のみです」

各隊指導者と団委員には、これについて、事前に説明が行われている。スカウトに直接話をするのはこれが初めてだ。

スカウトたちは、どうしたらいいか全然わからない。

まことは、「よくわからないけど、隊長の言うことをしっかり聞くことにしよう」と思った。

白木隊長は、張り切って言った。

「みんな、かっこつけま賞をゲットしよう」

報告は、ビーバー隊から始まった。

スタンツを行うだけだ。ビーバースカウトは、一人で発表する経験はまだない。

白木隊長が舞台上上がってから「集合」をかけた。舎営のときと同じように浜嶋団委員長が一番前に来てリーダーを並べせた。

「リーダーの勝ちー！」

浜嶋団委員長が最初に言った。ビーバー隊で取り組んでいることを他の隊にも見せたいという狙いが込められている。スカウトたちも言われたとおりに頑張っている。

スタンプは、夜になって七夕の願い事を書くところから始まる。ビーバー隊のリーダーは、スカウトには練習なしで、リーダーに言われたとおりにすればいいと考えていた。初めてスタンプを行うスカウトも自然にできると考えている。

まことは、「ちょっと恐いなあ」と思ったけれど、何も考えない方が気分は楽だと思った。

全体として混乱が無く進みそうだ。

吉川団委員は、舞台の下で大きな声で客席に向かって言った。

「夜ー！ 第一山小屋で就寝前 七夕の願い事ー！」

これは、スタンプの場面を説明しているセリフだ。吉川団委員は、シナリオを見ながらやっている。

そこで、白木隊長と下北副長とスカウトだけが、舞台に残った。

「七夕は7月7日です。今日は4日でちょっと早いけど、今からみんなの願い事を短冊に書いてもらおうかな」

白木隊長から白い紙がスカウトに渡された。これはお芝居だから、スカウトは紙に書く真似をするだけだ。

「5分が過ぎましたー！」

また、吉川団委員が言った。

「早いねー、もう書けたの。だれか読んでくれるかな？」

たけし君が読んだ。

「長生きができるようにしたい」

「なんだって？ お年寄りかい。次はけいた君」

「長生きができるようにしたい」

「え、たけし君と一緒にだね」

「思いつかなかったからひとみちゃんの書いたのを見て書いたの」

「そうだったねー」

白木隊長は、会場に聞こえるように大きな声を出した。

「これは難しいなあ。でも、なんとか実現させよう。じゃあ、明日を楽しみにして下さい。みんな、おやす

み！」

「その後の第3小屋の中一。リーダー会議が始まったー！」

リーダーたちの会議の様子だ。

まことは、知らない話だから興味津々で、しっかり聞いていた。

白木隊長 : それではリーダー会議を行います。

早速、七夕の願い事についてです。

浜嶋団委員長 : ちょっと見せて。えー！、みんな一緒だよ。「長生きができますように」って書いてある。

なんでみんな同じなの？ まあ、いいか。

白木隊長 : それでは、どのように願い事を叶えてあげたらいいか考えましょう。

藤橋副長 : 今回の舎営のテーマをもとに考えてみればどうですか。

下北副長 : はあ、どういうことですか？

藤橋副長 : 自然が成長すれば、私たち人間も長く生きることができると思います。

白木隊長 : 長生きすることは、自然を育てることか。それを体験させてあげれば願いが叶うことになる
と言う意味ですか。

藤橋副長 : そうです。それに、長生きという言葉がヒントになります。ちょっと考えてみては？

下北副長 : 長生き？ 長生き？ 長生き？

藤橋副長 : 自然が成長することで、長生きと関連させてはどうでしょう。

下北副長 : 長生き、長生き。あ、長い木だ。長い木になればいい。

白木隊長 : そうか。長い木か。どうやってする？

下北副長 : うん。これはゲームだわ。ふふふ。

藤橋副長 : どうするんや。

下北副長 : まあ、任せて下さい。坂本副長と考えます。

坂本副長 : 俺と？ なんか当てがあるのか？

下北副長 : 明日の閉村式を楽しみにして下さい。

白木隊長 : そうですか、じゃあ、藤橋副長からのヒントをもとに下北副長と坂本副長にお任せします。

まことは、このスタンスで、長い木が生まれた理由がわかった。

「彦星、織姫の登場ー！ 2人が願い事を叶えるー！」

白木隊長が先に舞台に上がって、「集合」をかけた。スカウトとお母さんたちが舞台に上がって正面を向いた。

「それでは、七夕の願い事を叶えるために彦星、織姫をお願いします。彦星さん、織姫さん、お願いします」

衣装に着替えた2人がでてきた。笹の代わりは、人間の寺田副育成会長だった。寺田副育成会長は、腕を横に広げている。

「笹の代わりー！ ハハハ！」

大きな笑い声が会場に響いた。太った笹に会場のみんなが笑った。

織姫が説明を始めた。

「みんなの願い事は、長生きしたいということでしたね。そこで、その願いを叶えます。みんなには、今亀になってもらいます。それからじゃんけんで成長します。じゃんけんに勝ったら、亀はうさぎになります。うさぎ同士でじゃんけんに勝ったら、くまになります。くま同士でじゃんけんに勝ったら、長い木になります。長い木になったらじっと立っていて下さい」

またじゃんけんゲームを開始した。

これは自由にやればいいことだから、誰もが自然にできた。

みんなが長い木になって、じっと立っている。

「今、みんなは、『長い木』になりました。長生きしたいという願い事で、長い木になりました。私たちは、自然を大切にすることで長生きできるのです」

この説明を聞いて、見ている人が驚いて笑っていた。その後のビバレンジャーバッジの授与まででスタンは終わった。

最後は、全員が整列して前を向いた。

「これで、ビーバー隊の舎営報告を終わります。敬礼」

まことにとって、初めてのスタンスだった。

「長かったなあ。疲れたわ。これからもこんなスタンスをやるのかな。楽しくなってきた」

□ ボーイスカウトの活動はすごいことがいっぱい

ビーバー隊の後は、カブ隊、ボーイ隊、ベンチャー隊と報告が続いていく。それぞれの年代で発表形式は異なる。いずれにしてもスカウト自身に発表の場を提供し、発表に慣れさせることが目的と考えている。

カブ隊は、写真をたくさん見せながらカブ隊の隊長が説明した。

奈良の曽爾高原というところに3泊4日で行った。スカウトは9人で保護者は同行していない。きつい山を登ったり、川で遊んだり、組単位で活動を行う。デンリーダーや副長が、組を助ける。スカウト同士で助け合いができるように指導を行っている。みんないい顔をした写真が映しだされた。

まことは、「きっと楽しかっただろうな。ビーバー隊もおもしろかったけど、カブ隊はもっとおもしろくなるんだろうなあ。早く僕も行きたいな」と思った。

最後は、スカウトが1人ずつ舞台上上がって感想文を読んだ。舎営が終わってから作成した思い出集を手
に持っている。

まことは、それを聞きながら、いろいろ思った。

・「肝試しは、最初にこわがっていたことがうそみたいでおもしろかった。・・・」

「ふーん。肝試しは、そんなに恐くないのか、僕らは雨でできなかったから、来年はやりたいな」

順番にスカウトの感想が続いた。

・「川に行って、最後にスイカ割りをしました。全員やっても割れなかったので悔しかったです。・・・」。

「あれっ！ ビーバー隊は1人目で割れたよ。どっちも残念だったってことかな。おもしろいわ」

・「山登りは一度登って疲れて、お昼御飯を食べたらまたすぐに登ったから疲れた。・・・」

「いいなあ。本格的な山登りをしてみたいなあ。それまでに体力をつけなくちや」

・「天体望遠鏡を見て星のことを学びました。・・・」

「星の観察もしたのか。おもしろそうだなあ。雨が降るといろいろなことができなくなってしまう」

・「舎営で一番楽しかったのは、キャンプファイヤーです。キャンプファイヤーの中でも一番おもしろかつたのは、スタントです。・・・」

「やっぱり、スタントをやるんだ。カブ隊は自分たちで考えてやるみたい。そんなことができるのかな」

・「本舎営でもらえた賞はニコニコ賞です。4日間ニコニコしていたのでもらえました。青色のチーフリングを貰ってうれしかったです。・・・」

「4日間は長いなあ。でも一人ずつ何か賞をもらえるんだ。僕は、何がもらえるかな。優秀スカウト賞を狙うぞ」

まことは、感想文を聞いただけなのにカブ隊の方が面白そうだなと思った。でも、感想文を書くのはまだ無理だ。カブ隊になったらできるかなと思った。

ボーイ隊は、4泊5日の夏キャンプの報告だ。ボーイ隊の内田隊長が、自然の山を開拓してキャンプ場を作り、それにツリーハウスも作ったことを説明した。参加したスカウトは、3人で、今日の参加は2人だった。

内田隊長が、舞台の上でボーイ隊の参加者として、副長2人とスカウト2人を整列させた。ビーバー隊と同じやりかただ。

「気おつけ。敬礼。ボーイ隊待機！」

テキパキと動いている。

まことは、「タイキってどういう意味かな？」と思った。

すると、内田隊長だけが舞台から降りて、舞台の下に置いてあるパソコンを操作しだした。

舞台の壁に写真が写された。

「いまからキャンプの報告をさせていただきます。

最初に、キャンプのお手伝いをしていただいた団委員さんにお礼を申し上げます。キャンプの2週間前に日帰りでキャンプサイトの伐採や広場の整地をお願いしました。また、キャンプ期間も参加してもらい階段作りやツリーハウスの場所の伐採や水汲みなどもお願いしました。お陰でプログラムが無事できたと思います。ありがとうございました」

この後で報告が始まった。写真を説明しながら、ときどきみんなに質問した。

「キャンプの感想を言って下さい」

すると、4人が順番に大きな声を出した。

吉川副長は、「理想的なキャンプでした」と言った。

内田隊長は続けた。

「ここで大声コンテストをしました。各自ここでそれを言ってください」

奥にいた多田班長の声がよく聞こえない。内田隊長が、「声が小さい！」と声を荒げた。

内田隊長が注意すると大きな声で言い直す。

「よし！ 次、吉川副長！」

「理想的なキャンプでした」

吉川副長は、どうやら何を聞いても同じ言葉を繰り返すらしい。3回目ぐらいから、会場から笑いが出てきた。

最後にツリーハウスの上に4人が立った写真と動画で説明した。

本当にツリーハウスを作ったことが、全員にわかった。

その動画では、ポーズを決めて声を出していた。パソコンから映像の声が出ているが、みんなが驚いている声でよく聞こえない。

そこで、浜嶋団委員長が言った。

「最後のセリフが聞こえなかった。みんな静かにしてここをしっかりと聞いて下さい。もう一度お願いします」

浜嶋団委員長は、キャンプに参加し、この撮影に立ち合っているので、大事なことがみんなに聞こえていなかったのを、やり直しをさせたのだ。

会場がシーンと静かになった。

「・・・・・・、2団物置」

とカメラを持っていたリーダーの声が小さく聞こえた。コマーシャルのセリフだ。これが聞こえたので、みんながどっと笑った。

ボーイ隊になると、このような楽しいシーンを残すのが伝統だ。ボーイ隊の報告は、浜嶋団委員長から予め指示があったように、写真や映像だけでなく、全員のスタントの動きを取り入れながら、発表したのも、まことも退屈しなかった。また、まことは、みんなで揃っておどけたポーズを取って遊んでいることに、ボーイ隊のキャンプってスカウトが楽しんでいるなと思った。

最後に、高井隊長からベンチャー隊のプロジェクトの報告があった。これは従来通りの報告形式だった。「今日は休んでいますが、2人で屋久島プロジェクトをしています。屋久島の自然に関する調査を行っています。まだ、課題を整理中なので4月に本人から報告させていただきます」

スカウトが2人だけで屋久島に行った。青春18きっぷ、夜行バスや船を利用する。ただ行くだけでなく、絶滅危惧植物などの実態を観測するなどをテーマにしたプロジェクトを抱えている。この計画は、団委員会に説明会を開催し承認を得ている。

次に、残りの高校1年生の3人がそれぞれのテーマを発表した。

世界スカウトジャンボリーでアンケートを取ったこと、世界の料理を調べた事を2人が発表した。ときどき英語も話している。ベンチャーになると英語も話す。

最後の1人が、学校行事でイギリスに行ったことを「イギリスの車窓から」というテーマで発表した。これらのベンチャー隊のプロジェクトの発表は、スカウトや保護者、団委員に大きな反響を与えた。

□ やったよ。僕たち「かっこつけま賞」をゲットだ！

報告会が終わった。

「それでは、表彰をしますので、椅子だけ片づけて下さい」

浜嶋団委員長長の指示があった。全員が協力して椅子を片づけ出した。すごく早く片づいてしまった。

この間に、「かっこつけま賞」の採点の集計が行われた。

浜嶋団委員長が前にでて、黙って腕を上げて合図をした。

「U字形だ！」

腕の形を見て、みんながそう言った。浜嶋団委員長は、腕でU字の形を作っている。

ビーバー隊では、U字形は行わない。まことは、分からないのできょろきょろしている、白木隊長がスカウトたちに並ぶ位置を教えている。その後で、浜嶋団委員長は、もっと後ろに下がってと腕を前の方に出して合図している。全体の位置を2メートル後ろにずらした。

最初に、「かっこつけま賞」の表彰が行われた。

浜嶋団委員長は、各隊の点数を順番に読みあげた。最初に言われたBVS隊の点数は310点だった。最後まで聞くと、BVS隊が優勝したことが分かった。

「やったー！」

「やったー！」

ビーバー隊のスカウトは全員大喜びだ。

「ビーバー隊が第1回目のかっこつけま賞を受賞しました。おめでとう。ビーバー隊は、全員前に並んで下さい」

白木隊長が、一番うれしかったようで、にこにこして「やったよ。やったよ」と言いながら、みんなを前に押していた。

まことも全員いる場での表彰は初めてだ。浜嶋団委員長の前に並んだ。そして、ここで並ぶために後ろに下がったことがわかった。

浜嶋団委員長は、表彰リボンだけは準備していた。

「それでは、スカウト全員に渡しましょう。全員手を出して下さい」

浜嶋団委員長は、差し出された手にリボンを伸ばして、渡した。

「これから、ビーバー隊に祝声を贈りたいと思います。ビーバー隊回れ右！」

ビーバー隊のスカウトと隊長、副長は、にこにこしながら、みんなの方を向いた。

「ビーバー隊おめでとう。いやさか、いやさか、いやさか」

「ありがとう、いやさか」とリーダーだけが返事をした。

ビーバースカウトは、ビーバー隊で「いやさか」をしないので、ちんぷんかんぷんだった。

こうして全プログラムが終了し、全体の片づけが始まった。

片づけが終わった時点で、全体の解散となった。白木隊長がビーバー隊を集めた。白木隊長は、にこにこ顔でうれしそうに言った。

「やったね。報告会のスタントがよかったんだよ。それに、みんなお行儀良くしていたね。みんな良く頑張りました」

まことは、帰り道でお母さんに言った。

「お母さん、ぼくたちやったね。今日もお父さんにかっこよかったことを話してあげようね」

「そうだね。楽しみにしているからね。よかった。よかった」

「でも、他の隊の活動もおもしろかったね」

「まことたち、おとなしく聞いていたのは、おもしろかったからだね」

「いっぱい話を聞いて、これからが楽しみになったよ」

「すこしずつ頑張っただね」

著者紹介

浜嶋 鉦一郎

- 1972年 名古屋大学工学部土木工学科卒業
- 1974年 名古屋大学大学院工学研究科修了
- 2010年 株式会社大林組退職
- 1986年 名古屋大学工学博士
- 1988年 日本ボーイスカウト大阪連盟吹田地区吹田第19団に入団、団委員
- 1989年 カブ隊デンドッド
- 1990年 カブ隊副長、ちかいをたてる
- 1991年 ボーイ隊副長
- 1993年 日本ボーイスカウト大阪連盟豊中地区豊中第2団転団、ボーイ隊副長
- 1999年 カブ隊隊長
- 2010年 団委員長、現在に至る。
- 2016年 ほくせつ地区会計監査。ボーイスカウト豊中協議会事務局
- 1990年 ウッドバッジ研修所カブ課程修了
- 1991年 ウッドバッジ研修所ボーイ課程修了
- 2010年 団運営研修所修了
- 2012年 ウッドバッジ研修所ベンチャー課程修了
- 2017年 団委員上級訓練課程修了